

令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金
(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業) 交付規程

令和2年4月14日 GEC第000154号
公益財団法人地球環境センター制定

第1章 総則

(通則)

第1条 二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業)の交付については、補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律(昭和30年法律第179号。以下「適正化法」という。)、補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律施行令(昭和30年政令第255号。以下「適正化法施行令」という。)、その他の法令、二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業)交付要綱(令和2年4月1日付け環地国発第2003301号。以下「交付要綱」という。)及びコ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業実施要領(平成31年4月1日付け環地国発第1904012号(改正 令和2年4月1日環地国発第2003301号)。以下「実施要領」という。)の規定(以下「法令等」という。)によるほか、この規程の定めるところによる。

(交付の目的)

第2条 この規程は、実施要領の規定に基づき、公益財団法人地球環境センター(以下「センター」という。)が行う間接補助金(以下「補助金」という。)を交付する事業の手續等を定め、もってその業務の適正かつ確実な実施を図り、交付要綱第2条の目的の達成に資することを目的とする。

(対象とする事業の分類)

第3条 この規程は、実施要領第3の(1)に規定する事業のうち、令和2年度に開始する事業について補助金の交付を申請する場合は第2章、2019年度(平成31年度)に複数年度計画の事業について補助金の交付を受けた者が、前年度から継続実施する事業(以下「継続事業」という。)の交付を申請する場合は第3章の規定に定めるとおりとする。

第2章 令和2年度開始事業に係る規程

(交付の対象)

第4条 センターは、第2条の目的を達成するため、国際コンソーシアム(日本法人と外国法人等により構成され、事業を効果的かつ効率的に実施する組織)が実施する実施要領第3の(1)に規定する事業(以下「補助事業」という。)に要する経費のうち、補助金の交付の対象として別表第1の第2欄において

センターが認める経費（以下「補助対象経費」という。）について、環境大臣（以下「大臣」という。）からの交付の決定額の範囲内において、補助金を交付するものとする。

- 2 前項に規定する補助事業の申請は、国際コンソーシアムの構成員が共同で行うものとする。その代表者は別紙の2に規定する日本法人とし、補助金の交付の対象者とする。
- 3 前項に規定する代表者を代表事業者、それ以外の事業者を共同事業者という。代表事業者は、優れた低炭素技術のリノベーション及び実証を含む補助事業の実施に係る全ての責を負うものとし、共同事業者が法令等若しくは本規程に違反した場合についても代表事業者がその責を負うものとする。
- 4 他の法令及び予算に基づく補助金等の交付を受けて行われる事業については、交付の対象としない。
- 5 補助事業の実施に関する要件その他の必要な事項は、別紙に定めるとおりとする。

（交付額の算定方法）

第5条 この補助金の交付額は、次に掲げる方法により算出するものとする。

- 一 総事業費から寄付金その他の収入額を控除した額を算出する。
 - 二 別表第1の第2欄に掲げる補助対象経費と第3欄に掲げる基準額とを比較して少ない方の額を選定する。
 - 三 一により算出された額と二で選定された額とを比較して少ない方の額に、別表第1の第4欄に掲げる補助率を乗じて得た額を交付額とする。ただし、算出された額に1,000円未満の端数が生じた場合には、これを切り捨てるものとする。
- 2 交付額の算出に当たっては、当該補助金に係る消費税及び地方消費税に係る仕入控除税額（補助対象経費に含まれる消費税及び地方消費税相当額のうち、消費税法（昭和63年法律第108号）の規定により仕入れに係る消費税額として控除できる部分の金額及び当該金額に地方税法（昭和25年法律第226号）の規定による地方消費税の税率を乗じて得た金額の合計額に補助率を乗じて得た金額をいう。以下「消費税等仕入控除税額」という。）を減額して算出しなければならない。ただし、算出時において消費税等仕入控除税額が明らかでないものについては、この限りでない。

（交付の申請）

第6条 補助金の交付を受けようとする者（共同で申請する場合は代表事業者を指す。以下「申請者」という。）は、様式第1による交付申請書をセンターに提出しなければならない。

（変更交付申請）

第7条 補助金の交付の決定を受けた者（以下「補助事業者」という。）は、補助金の

交付決定後の事情の変更により申請の内容を変更して補助金の額の変更申請を行う場合には、速やかに様式第2による変更交付申請書をセンターに提出しなければならない。

(交付の決定)

- 第8条 センターは、第6条の規定による交付申請書又は前条の規定による変更交付申請書の提出があった場合には、当該申請書の内容を審査し、補助金を交付すべきもの又は交付の決定の内容を変更すべきものと認めたときは、交付決定又は変更交付決定を行い、様式第3による交付決定通知書又は様式第4による変更交付決定通知書を申請者に送付するものとする。この場合において、センターは、適切な交付を行うため必要があると認めるときは、補助金の申請に係る事項につき修正を加えて交付決定又は変更交付決定を行うことができるものとする。
- 2 第6条の規定による交付申請書又は前条の規定による変更交付申請書が到達してから、当該申請に係る前項による交付の決定を行うまでに通常要すべき標準的な期間は、30日とする。
 - 3 センターは、第5条第2項ただし書による交付額の算定により交付の申請がなされたものについては、補助金に係る消費税等仕入控除税額について、補助金の額の確定又は消費税及び地方消費税の申告後において精算減額又は返還を行うこととする旨の条件を付して交付の決定を行うものとする。
 - 4 センターは、第1項の通知に際して次条に定める条件のほか、必要な条件を付することができる。

(交付の条件)

- 第9条 補助金の交付の決定には、次の条件が付されるものとする。
- 一 補助事業の一部を第三者に委託し、又は第三者と共同して実施する場合は、実施に関する契約を締結しなければならない。
 - 二 補助事業を遂行するため、売買、請負その他の契約をする場合は、一般の競争に付さなければならない。ただし、補助事業の運営上、一般の競争に付することが困難又は不適當である場合は、指名競争に付し、又は随意契約によることができる。
 - 三 次に掲げる事項に該当する場合は、あらかじめ様式第5による計画変更承認申請書をセンターに提出し、その承認を受けなければならない。なお、補助金の額に変更を伴う場合は、第7条に定める手続によるものとする。
 - ア 別表第2の第1欄に示す補助事業に要する経費の配分を変更しようとするとき。ただし、各配分額のいずれか低い額の15パーセント以内の変更を除く。
 - イ 補助事業の内容を変更しようとするとき。ただし、補助目的及び事業能率に関係がない事業計画の細部の変更である場合を除く。
 - 四 補助事業の全部若しくは一部を中止し、又は廃止しようとする場合は、様式第6による中止（廃止）承認申請書をセンターに提出して承認を受けなければ

ならない。

五 補助事業が予定の期間内に完了しないと見込まれる場合又は補助事業の遂行が困難となった場合には、速やかに様式第7による遅延報告書をセンターに提出して、その指示を受けなければならない。ただし、変更後の完了予定期日が当初の完了予定期日の属する年度を超えない場合で、かつ、当初の完了予定期日後2ヶ月以内である場合はこの限りでない。

六 補助事業の遂行及び収支の状況について、センターの要求があったときは速やかに様式第8による遂行状況報告書をセンターに提出しなければならない。

七 補助金の額の確定が行われるまでの間において、合併・分割等により補助事業者の名称又は住所の変更が生じたときは、遅滞なくセンターに報告しなければならない。

八 補助事業の経費については、帳簿及び全ての証拠書類を備え、他の経理と明確に区分して経理し、常にその収支の状況を明らかにしておくとともに、これらの帳簿及び証拠書類を補助事業の完了（中止又は廃止の承認を受けた場合を含む。）の日の属する年度の終了後5年間、センターの要求があったときは、いつでも閲覧に供せるよう保存しておかなければならない。

九 センターは、補助事業の適正かつ円滑な実施を確保するために必要があると認めるときは、補助事業者に対して、補助事業の経理について調査し、若しくは指導し、又は報告を求めることができる。

十 補助事業完了後に、消費税及び地方消費税の申告により補助金に係る消費税等仕入控除税額が確定した場合には、様式第9による消費税及び地方消費税に係る仕入控除税額報告書により速やかにセンターに報告しなければならない。ただし、当該消費税等仕入控除税額を減額して実績報告を行った場合には、この限りでない。

十一 センターは、前号の報告があった場合には、当該消費税等仕入控除税額の全部又は一部の返還を命ずるものとする。当該返還の期限は、その命令のなされた日から20日以内とし、期限内に納付がない場合は、未納に係る金額に対して、その未納に係る日数に応じて年利10.95パーセントの割合で計算した延滞金を徴するものとする。

十二 センターは、この補助事業の完了によって補助事業者に相当の収益が生ずると認められる場合には、補助金の交付の目的に反しない場合に限り、補助事業の完了した会計年度の翌年度以降の会計年度において、交付した補助金の全部又は一部に相当する金額をセンターに納付させることができる。

この時の収益納付額は、補助事業をすべて終了した年度以降の3年間について、以下の算出式により算出した額とする。

$$\text{収益納付額} = (A - B) \times C / D - E$$

A：収益額（補助事業により取得した産業財産権等の譲渡、実施権の設定による収益のうち補助事業が寄与した部分の相当額から関係経費等を差し引いた額の各年度の累計）

B：控除額（補助事業に要した経費のうち自己負担額）

C：補助金確定額

D：補助事業に係る支出額（補助事業に要した経費と補助事業終了後に追加的に要した経費の合計）

E：納付額（前年度までに収益納付を行っている場合の当該納付額）

（注1）相当の収益が生じた場合とは、 $\text{収益額} - \text{控除額} > 0$ の場合とする。

（注2）収益額の計算に当たっては、産業財産権等に対する補助事業の寄与が一部である場合には、公正妥当な寄与率を収益に乗じることとする。

（注3）関係経費等には、当該産業財産権等に係る分として厳格に区分経理できる場合に限り、必要に応じて当該産業財産権等に係る管理費等を含むことができる。

（注4）補助事業が複数年度に亘る場合は、補助対象経費、補助金確定額、補助事業に要した経費は各年度の累計とする。

十三 補助事業者は、補助事業により取得し、又は効用の増加した財産（以下「取得財産等」という。）については、様式第10による取得財産等管理台帳を備え、当該取得財産に二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金（コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業）事業で取得した財産である旨を明示するとともに、補助事業の完了後においても、善良な管理者の注意をもって管理し、補助金の交付の目的に従って、その効率的運用を図らなければならない。

十四 補助事業者は、取得財産等のうち、不動産、船舶、航空機、浮標、浮き橋及び浮ドック並びにこれらの従物、並びに補助事業により取得し又は効用の増加した価格が単価50万円以上の機械及び器具、並びにその他大臣が定める財産については、減価償却資産の耐用年数等に関する省令（昭和40年大蔵省令第15号）で定める期間を経過するまで、センターの承認を受けずに、補助金の交付の目的に反して使用し、譲渡し、交換し、貸し付け、担保に供し、又は取壊し（廃棄を含む。）を行ってはならない。なお、財産処分に係る承認申請、承認条件その他必要な事務手続については、「環境省所管の補助金等で取得した財産の処分承認基準について」（平成20年5月15日付環境会発第080515002号大臣官房会計課長通知。以下「財産処分承認基準」という。）に準じて行うものとする。また、財産処分承認基準第4に定める財産処分納付金について、センターが定める期限内に納付がない場合は、未納に係る金額に対して、その未納に係る日数に応じて年利3パーセントの割合で計算した延滞金を徴するものとする。

十五 補助事業者は、補助目的の達成のために必要となる取得財産等の譲渡を共同事業者に行い、当該共同事業者が取得財産等の使用を開始する場合には、様式第11による財産譲渡報告書により、あらかじめセンターに報告しなければならない。補助事業者は、取得財産等を共同事業者に譲渡する場合にあっても、当該譲渡後も補助金の目的に反する使用がなされないよう自らの責任の下で管理しなければならない。

十六 補助事業者は、前号で定める期間を経過するまでの間、補助事業により取得した

温室効果ガス排出削減効果について J-クレジット制度への登録を行ってはならない。

十七 補助事業者は、補助金の交付の目的に従って、補助事業の完了後においても、二酸化炭素削減効果に関する目標を達成するものとする。ただし、やむを得ず達成できない場合にはセンターが別に定める事業報告書にその理由を付記して報告しなければならない。

十八 補助事業者は、補助事業の完了後、環境省が実施する「エネルギー起源 CO2 排出削減技術評価・検証事業」において、取得財産等の稼働状況、管理状況及び二酸化炭素削減効果その他補助事業の成果を検証するために必要な情報について、環境省（環境省から委託を受けた民間事業者を含む。）から調査の要請があった場合には、当該調査に協力し、必要な情報を提供しなければならない。

（申請の取下げ）

第10条 申請者は、第8条第1項の交付の決定の通知を受けた場合において、交付の決定の内容又はこれに付された条件に対して不服があり、申請を取り下げようとするときは、当該通知を受けた日から起算して15日以内に書面をもってセンターに交付申請の取下げを申し出なければならない。

（補助事業の遂行の命令等）

第11条 センターは、第9条第六号の規定による報告書及び第2項の規定による報告書並びに職員の立入検査等の結果に基づき、補助事業が法令等、本規程、交付の決定の内容又はこれに付した条件に従って遂行されていないと認められるときは、補助事業者に対し、これらに従って補助事業を遂行すべきことを指導することができる。

2 大臣又はセンターは、補助金交付及び補助事業の適正を期するため必要があるときは、補助事業者に対して報告を求め、又はその職員に補助事業者の事業場に立ち入り、帳簿書類その他の物件を検査させ、若しくは関係者に質問させることができるものとする。

（実績報告書）

第12条 補助事業者は、補助事業が完了（中止又は廃止の承認を受けた場合を含む。）したときは、その日から起算して30日を経過した日又は補助事業の完了した日の属する年度の3月10日のいずれか早い日までに様式第12による完了実績報告書をセンターに提出しなければならない。

2 補助事業の実施期間内において、国の会計年度（毎年4月1日から翌年の3月31日までの期間）が終了したときは、翌年度4月10日までに様式第13による年度終了実績報告書をセンターに提出しなければならない。

3 補助事業者は、第1項又は第2項の実績報告を行うに当たって、第5条第2項ただし書の規定により交付額を算出した場合において、補助金に係る消費税等仕入控除税額が明らかな場合には、当該消費税等仕入控除税額を減額して報告しなければならない。

（補助金の額の確定等）

- 第13条 センターは、前条第1項の報告を受けた場合には、報告書等の書類の審査及び必要に応じて現地調査等を行い、その報告に係る補助事業の実施結果が補助金の交付の決定の内容（第9条第三号に基づく承認をした場合は、その承認された内容を含む。）及びこれに付した条件に適合すると認めるときは、交付すべき補助金の額を確定して、様式第14による交付額確定通知書により補助事業者へ通知するものとする。なお、センターが現地調査等を行う場合は、補助事業者はこれに協力するものとする。
- 2 センターは、補助事業者へ交付すべき補助金の額を確定した場合において、既にその額を超える補助金が交付されているときは、その超える部分の補助金の返還を命ずるものとする。
- 3 前項の補助金の返還期限は、その命令のなされた日から20日以内とし、期限内に納付がない場合には、未納に係る金額に対して、その未納に係る日数に応じて年利10.95パーセントの割合で計算した延滞金を徴するものとする。

（是正のための措置）

- 第14条 センターは、第12条第1項及び第2項の報告を受けた場合において、その報告に係る補助事業の成果が補助金の交付の決定の内容及びこれに付した条件に適合しないと認めるときは、当該補助事業につき、これに適合させるための措置をとるべきことを補助事業者に対して命ずることができる。

（補助金の支払）

- 第15条 補助金は、第13条第1項の規定により交付すべき補助金の額を確定した後に支払うものとする。ただし、センターが必要と認める場合においては、概算払をすることができる。
- 2 補助事業者は、前項の規定により補助金の支払を受けようとするときは、様式第15による精算（概算）払請求書をセンターに提出しなければならない。

（交付決定の解除等）

- 第16条 センターは、第9条第四号による補助事業の全部若しくは一部の中止若しくは廃止の申請があった場合又は次の各号のいずれかに該当する場合には、第8条第1項の交付の決定の全部又は一部を解除することができる。ただし、第四号の場合において、補助事業のうちすでに経過した期間に係る部分については、この限りではない。
- 一 補助事業者が、法令等若しくは本規程に基づくセンターの指示等に従わない場合
 - 二 補助事業者が、補助金を補助事業以外の用途に使用した場合
 - 三 補助事業者が、補助事業に関して不正、怠慢、その他不適当な行為をした場合
 - 四 天災地変その他補助金の交付の決定後に生じた事情の変更により、補助事業の全部又は一部を継続する必要がなくなった場合その他の理由により補助事業を遂行することができない場合（補助事業者の責に帰すべき事情による場合を除く。）
- 2 センターは、前項の解除を行った場合は、既に当該解除に係る部分に関し補助金が交付されているときは、期限を付して当該補助金の返還を命ずるものとする。
- 3 前項に基づく補助金の返還については、第13条第3項の規定を準用する。

(事業報告書の提出)

第17条 補助事業者は、補助事業の完了した日からその年度の3月末までの期間及びその後の3年間の期間について、年度毎に年度の終了後30日以内に当該補助事業による過去1年間（初年度は、補助事業を完了した日から翌年度3月末までの期間）の二酸化炭素削減効果等について、様式第16による事業報告書を大臣に提出しなければならない。

2 補助事業者は、前項の報告をした場合、その証拠となる書類を当該報告に係る年度の終了後3年間保存しなければならない。

(秘密の保持)

第18条 センターは、申請者及び補助事業者がこの規程に従ってセンターに提出する各種申請書類及び経理等の証拠書類等については、補助金の交付のための審査及び補助金の額の確定のための検査等、補助事業の遂行に関する一切の処理等を行う範囲でのみ使用するとともに、善良な管理者の注意をもって適切に管理するものとする。

(その他)

第19条 この規程に定めるもののほか、補助金の交付に関するその他必要な事項は、センターが別に定める。

第3章 前年度からの継続事業に係る規程

(交付の対象)

第20条 センターは、継続事業に要する経費のうち、補助金の交付の対象として別表第1の第2欄においてセンターが認める経費（以下「補助対象経費」という。）について、環境大臣（以下「大臣」という。）からの交付の決定額の範囲内において、補助金を交付するものとする。

2 前項の継続事業に係る補助金の交付を申請できる者は、別紙の2に規定する者とする。

3 別紙の2の規定に該当する複数の事業者が共同で事業を実施する場合は、コンソーシアムを構成するものとし、その代表者となる法人を補助金の交付の対象者とする。また、この場合において、当該代表者を代表事業者、それ以外の事業者を共同事業者という。代表事業者は、優れた低炭素技術のリノベーション及び実証を含む継続事業の実施に係る全ての責を負うものとし、共同事業者が法令等若しくは本規程に違反した場合についても代表事業者がその責を負うものとする。

4 他の法令及び予算に基づく補助金等の交付を受けて行われる事業については、交付の対象としない。

5 継続事業の実施に関する要件その他の必要な事項は、別紙に定めるとおりと

する。

(交付額の算定方法)

第21条 この補助金の交付額は、次に掲げる方法により算出するものとする。

一 総事業費から寄付金その他の収入額を控除した額を算出する。

二 別表第1の第2欄に掲げる補助対象経費と第3欄に掲げる基準額とを比較して少ない方の額を選定する。

三 一により算出された額と二で選定された額とを比較して少ない方の額に、別表第1の第4欄に掲げる補助率を乗じて得た額を交付額とする。ただし、算出された額に1,000円未満の端数が生じた場合には、これを切り捨てるものとする。

2 交付額の算出に当たっては、当該補助金に係る消費税及び地方消費税に係る仕入控除税額（補助対象経費に含まれる消費税及び地方消費税相当額のうち、消費税法（昭和63年法律第108号）の規定により仕入れに係る消費税額として控除できる部分の金額及び当該金額に地方税法（昭和25年法律第226号）の規定による地方消費税の税率を乗じて得た金額の合計額に補助率を乗じて得た金額をいう。以下「消費税等仕入控除税額」という。）を減額して算出しなければならない。ただし、算出時において消費税等仕入控除税額が明らかでないものについては、この限りでない。

(交付の申請)

第22条 補助金の交付を受けようとする者（共同で申請する場合は代表事業者を指す。

以下「申請者」という。）は、様式第17による交付申請書をセンターに提出しなければならない。

(変更交付申請)

第23条 補助金の交付の決定を受けた者（以下「継続補助事業者」という。）は、

補助金の交付決定後の事情の変更により申請の内容を変更して補助金の額の変更申請を行う場合には、速やかに様式第18による変更交付申請書をセンターに提出しなければならない。

(交付の決定)

第24条 センターは、第22条の規定による交付申請書又は前条の規定による変更交付申請書の提出があった場合には、当該申請書の内容を審査し、補助金を交付すべきもの又は交付の決定の内容を変更すべきものと認めたときは、交付決定又は変更交付決定を行い、様式第19による交付決定通知書又は様式第20による変更交付決定通知書を申請者に送付するものとする。この場合において、センターは、適切な交付を行うため必要があると認めるときは、補助金の申請に係る事項につき修正を加えて交付決定又は変更交付決定を行うことができるものとする。

2 第22条の規定による交付申請書又は前条の規定による変更交付申請書が到達して

から、当該申請に係る前項による交付の決定を行うまでに通常要すべき標準的な期間は、30日とする。

- 3 センターは、第21条第2項ただし書による交付額の算定により交付の申請がなされたものについては、補助金に係る消費税等仕入控除税額について、補助金の額の確定又は消費税及び地方消費税の申告後において精算減額又は返還を行うこととする旨の条件を付して交付の決定を行うものとする。
- 4 センターは、第1項の通知に際して次条に定める条件のほか、必要な条件を付すことができる。

(交付の条件)

第25条 補助金の交付の決定には、次の条件が付されるものとする。

- 一 継続事業の一部を第三者に委託し、又は第三者と共同して実施する場合は、実施に関する契約を締結しなければならない。
- 二 継続事業を遂行するため、売買、請負その他の契約をする場合は、一般の競争に付きなければならない。ただし、継続事業の運営上、一般の競争に付することが困難又は不適當である場合は、指名競争に付し、又は随意契約によることができる。
- 三 次に掲げる事項に該当する場合は、あらかじめ様式第21による計画変更承認申請書をセンターに提出し、その承認を受けなければならない。なお、補助金の額に変更を伴う場合は、第23条に定める手続によるものとする。
 - ア 別表第2の第1欄に示す継続事業に要する経費の配分を変更しようとするとき。ただし、各配分額のいずれか低い額の15パーセント以内の変更を除く。
 - イ 継続事業の内容を変更しようとするとき。ただし、補助目的及び事業能率に関係がない事業計画の細部の変更である場合を除く。
- 四 継続事業の全部若しくは一部を中止し、又は廃止しようとする場合は、様式第22による中止（廃止）承認申請書をセンターに提出して承認を受けなければならない。
- 五 継続事業が予定の期間内に完了しないと見込まれる場合又は継続事業の遂行が困難となった場合には、速やかに様式第23による遅延報告書をセンターに提出して、その指示を受けなければならない。ただし、変更後の完了予定期日が当初の完了予定期日の属する年度を超えない場合で、かつ、当初の完了予定期日後2ヶ月以内である場合はこの限りでない。
- 六 継続事業の遂行及び収支の状況について、センターの要求があったときは速やかに様式第24による遂行状況報告書をセンターに提出しなければならない。
- 七 補助金の額の確定が行われるまでの間において、合併・分割等により継続補助事業者の名称又は住所の変更が生じたときは、遅滞なくセンターに報告しなければならない。
- 八 継続事業の経費については、帳簿及び全ての証拠書類を備え、他の経理と

明確に区分して経理し、常にその収支の状況を明らかにしておくとともに、これらの帳簿及び証拠書類を継続事業の完了（中止又は廃止の承認を受けた場合を含む。）の日の属する年度の終了後5年間、センターの要求があったときは、いつでも閲覧に供せるよう保存しておかなければならない。

九 センターは、継続事業の適正かつ円滑な実施を確保するために必要があると認めるときは、継続補助事業者に対して、継続事業の経理について調査し、若しくは指導し、又は報告を求めることができる。

十 継続事業完了後に、消費税及び地方消費税の申告により補助金に係る消費税等仕入控除税額が確定した場合には、様式第25による消費税及び地方消費税に係る仕入控除税額報告書により速やかにセンターに報告しなければならない。ただし、当該消費税等仕入控除税額を減額して実績報告を行った場合には、この限りでない。

十一 センターは、前号の報告があった場合には、当該消費税等仕入控除税額の全部又は一部の返還を命ずるものとする。当該返還の期限は、その命令のなされた日から20日以内とし、期限内に納付がない場合は、未納に係る金額に対して、その未納に係る日数に応じて年利10.95パーセントの割合で計算した延滞金を徴するものとする。

十二 センターは、この継続事業の完了によって継続補助事業者に相当の収益が生ずると認められる場合には、補助金の交付の目的に反しない場合に限り、継続事業の完了した会計年度の翌年度以降の会計年度において、交付した補助金の全部又は一部に相当する金額をセンターに納付させることができる。

この時の収益納付額は、継続事業をすべて終了した年度以降の3年間について、以下の算出式により算出した額とする。

$$\text{収益納付額} = (A - B) \times C / D - E$$

A：収益額（継続事業により取得した産業財産権等の譲渡、実施権の設定による収益のうち継続事業が寄与した部分の相当額から関係経費等を差し引いた額の各年度の累計）

B：控除額（継続事業に要した経費のうち自己負担額）

C：補助金確定額

D：継続事業に係る支出額（継続事業に要した経費と継続事業終了後に追加的に要した経費の合計）

E：納付額（前年度までに収益納付を行っている場合の当該納付額）

（注1）相当の収益が生じた場合とは、収益額－控除額＞0の場合とする。

（注2）収益額の計算に当たっては、産業財産権等に対する継続事業の寄与が一部である場合には、公正妥当な寄与率を収益に乗じることとする。

（注3）関係経費等には、当該産業財産権等に係る分として厳格に区分経理できる場合に限り、必要に応じて当該産業財産権等に係る管理費等を含むことができる。

（注4）継続事業が複数年度に亘る場合は、補助対象経費、補助金確定額、継続事業に要した経費は各年度の累計とする。

十三 継続補助事業者は、継続事業により取得し、又は効用の増加した財産（以下「取得財産等」という。）については、様式第26による取得財産等管理台帳を備え、当該取得財産に二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金（コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業）事業で取得した財産である旨を明示するとともに、継続事業の完了後においても、善良な管理者の注意をもって管理し、補助金の交付の目的に従って、その効率的運用を図らなければならない。

十四 継続補助事業者は、取得財産等のうち、不動産、船舶、航空機、浮標、浮さん橋及び浮ドック並びにこれらの従物、並びに継続事業により取得し又は効用の増加した価格が単価50万円以上の機械及び器具、並びにその他大臣が定める財産については、減価償却資産の耐用年数等に関する省令（昭和40年大蔵省令第15号）で定める期間を経過するまで、センターの承認を受けずに、補助金の交付の目的に反して使用し、譲渡し、交換し、貸し付け、担保に供し、又は取壊し（廃棄を含む。）を行ってはならない。なお、財産処分に係る承認申請、承認条件その他必要な事務手続については、「環境省所管の補助金等で取得した財産の処分承認基準について」（平成20年5月15日付環境会発第080515002号大臣官房会計課長通知。以下「財産処分承認基準」という。）に準じて行うものとする。また、財産処分承認基準第4に定める財産処分納付金について、センターが定める期限内に納付がない場合は、未納に係る金額に対して、その未納に係る日数に応じて年利5パーセントの割合で計算した延滞金を徴するものとする。

十五 継続補助事業者は、補助目的の達成のために必要となる取得財産等の譲渡を共同事業者に行い、当該共同事業者が取得財産等の使用を開始する場合には、様式第27による財産譲渡報告書により、あらかじめセンターに報告しなければならない。継続補助事業者は、取得財産等を共同事業者に譲渡する場合であっても、当該譲渡後も補助金の目的に反する使用がなされないよう自らの責任の下で管理しなければならない。

十六 継続補助事業者は、前号で定める期間を経過するまでの間、継続事業により取得した温室効果ガス排出削減効果についてJ-クレジット制度への登録を行ってはならない。

十七 継続補助事業者は、補助金の交付の目的に従って、継続事業の完了後においても、二酸化炭素削減効果に関する目標を達成するものとする。ただし、やむを得ず達成できない場合にはセンターが別に定める事業報告書にその理由を付記して報告しなければならない。

十八 継続補助事業者は、継続事業の完了後、環境省が実施する「エネルギー起源CO2排出削減技術評価・検証事業」において、取得財産等の稼働状況、管理状況及び二酸化炭素削減効果その他継続事業の成果を検証するために必要な情報について、環境省（環境省から委託を受けた民間事業者を含む。）から調査の要請があった場合には、当該調査に協力し、必要な情報を提供しなければならない。

(申請の取下げ)

第26条 申請者は、第24条第1項の交付の決定の通知を受けた場合において、交付の決定の内容又はこれに付された条件に対して不服があり、申請を取り下げようとするときは、当該通知を受けた日から起算して15日以内に書面をもってセンターに交付申請の取下げを申し出なければならない。

(継続事業の遂行の命令等)

第27条 センターは、第25条第六号の規定による報告書及び第2項の規定による報告書並びに職員の立入検査等の結果に基づき、継続事業が法令等、本規程、交付の決定の内容又はこれに付した条件に従って遂行されていないと認められるときは、継続補助事業者に対し、これらに従って継続事業を遂行すべきことを指導することができる。

2 大臣又はセンターは、補助金交付及び継続事業の適正を期するため必要があるときは、継続補助事業者に対して報告を求め、又はその職員に継続補助事業者の事業場に立ち入り、帳簿書類その他の物件を検査させ、若しくは関係者に質問させることができるものとする。

(実績報告書)

第28条 継続補助事業者は、継続事業が完了(中止又は廃止の承認を受けた場合を含む。)したときは、その日から起算して30日を経過した日又は継続事業の完了した日の属する年度の3月10日のいずれか早い日までに様式第28による完了実績報告書をセンターに提出しなければならない。

2 継続事業の実施期間内において、国の会計年度(毎年4月1日から翌年の3月31日までの期間)が終了したときは、翌年度4月10日までに様式第29による年度終了実績報告書をセンターに提出しなければならない。

3 継続補助事業者は、第1項又は第2項の実績報告を行うに当たって、第4条第2項ただし書の規定により交付額を算出した場合において、補助金に係る消費税等仕入控除税額が明らかな場合には、当該消費税等仕入控除税額を減額して報告しなければならない。

(補助金の額の確定等)

第29条 センターは、前条第1項の報告を受けた場合には、報告書等の書類の審査及び必要に応じて現地調査等を行い、その報告に係る継続事業の実施結果が補助金の交付の決定の内容(第25条第三号に基づく承認をした場合は、その承認された内容を含む。)及びこれに付した条件に適合すると認めたときは、交付すべき補助金の額を確定して、様式第30による交付額確定通知書により継続補助事業者に通知するものとする。なお、センターが現地調査等を行う場合は、継続補助事業者はこれに協力するものとする。

2 センターは、継続補助事業者に交付すべき補助金の額を確定した場合において、既にその額を超える補助金が交付されているときは、その超える部分の補助金の返還を命ずるものとする。

3 前項の補助金の返還期限は、その命令のなされた日から20日以内とし、期限内に

納付がない場合には、未納に係る金額に対して、その未納に係る日数に応じて年利10.95パーセントの割合で計算した延滞金を徴するものとする。

(是正のための措置)

第30条 センターは、第28条第1項及び第2項の報告を受けた場合において、その報告に係る継続事業の成果が補助金の交付の決定の内容及びこれに付した条件に適合しないと認めるときは、当該継続事業につき、これに適合させるための措置をとるべきことを継続補助事業者に対して命ずることができる。

(補助金の支払)

第31条 補助金は、第29条第1項の規定により交付すべき補助金の額を確定した後に支払うものとする。ただし、センターが必要と認める場合においては、概算払をすることができる。

2 継続補助事業者は、前項の規定により補助金の支払を受けようとするときは、様式第31による精算(概算)払請求書をセンターに提出しなければならない。

(交付決定の解除等)

第32条 センターは、第25条第四号による継続事業の全部若しくは一部の中止若しくは廃止の申請があった場合又は次の各号のいずれかに該当する場合には、第24条第1項の交付の決定の全部又は一部を解除することができる。ただし、第四号の場合において、継続事業のうちすでに経過した期間に係る部分については、この限りではない。

一 継続補助事業者が、法令等若しくは本規程に基づくセンターの指示等に従わない場合

二 継続補助事業者が、補助金を継続事業以外の用途に使用した場合

三 継続補助事業者が、継続事業に関して不正、怠慢、その他不適当な行為をした場合

四 天災地変その他補助金の交付の決定後に生じた事情の変更により、継続事業の全部又は一部を継続する必要がなくなった場合その他の理由により継続事業を遂行することができない場合(継続補助事業者の責に帰すべき事情による場合を除く。)

2 センターは、前項の解除を行った場合は、既に当該解除に係る部分に関し補助金が交付されているときは、期限を付して当該補助金の返還を命ずるものとする。

3 前項に基づく補助金の返還については、第29条第3項の規定を準用する。

(翌年度における継続事業の開始)

第33条 継続補助事業者は、複数年度計画の継続事業のうち翌年度における継続事業について、翌年度の交付決定の日の前日までの間において当該継続事業を開始する必要がある場合は、様式第32による翌年度補助事業開始承認申請書をセンターに提出して承認を受けなければならない。

(事業報告書の提出)

第34条 継続補助事業者は、継続事業の完了の日の属する年度の終了後3年間の期間に

ついて、年度毎に年度の終了後30日以内に当該継続事業による過去1年間（初年度は、継続事業を完了した日から翌年度3月末までの期間）の二酸化炭素削減効果等について、様式第33による事業報告書を大臣に提出しなければならない。

- 2 継続補助事業者は、前項の報告をした場合、その証拠となる書類を当該報告に係る年度の終了後3年間保存しなければならない。

（秘密の保持）

第35条 センターは、申請者及び継続補助事業者がこの規程に従ってセンターに提出する各種申請書類及び経理等の証拠書類等については、補助金の交付のための審査及び補助金の額の確定のための検査等、継続事業の遂行に関する一切の処理等を行う範囲でのみ使用するとともに、善良な管理者の注意をもって適切に管理するものとする。

（その他）

第36条 この規程に定めるもののほか、補助金の交付に関するその他必要な事項は、センターが別に定める。

附 則

- 1 この規程は、令和2年4月14日から施行する。
- 2 継続補助事業者が、前年度事業の交付規程に基づき翌年度における継続事業の開始に係る承認を受けている場合は、本年度においてセンターが大臣から交付決定を受けた日から、継続補助事業者が本年度における継続事業に係る交付決定を受ける日の前日までの間において、継続事業を開始することができる。

別表第1

1. 補助事業	2. 補助対象経費	3. 基準額	4. 補助率
途上国におけるエネルギー起源二酸化炭素排出抑制のための途上国向け低炭素技術のシステム化、複数技術パッケージ化等によるリノベーション・実証事業（廃棄物分野）	補助事業を行うために必要な工事費（本工事費、付帯工事費、機械器具費、測量及試験費）、設備費、業務費及び事務費であって別表第2に掲げる経費並びにその他必要な経費でセンターが承認した経費	センターが必要と認められた額	<p>(ア)補助事業者が中小企業基本法（昭和38年法律第154号）第2条第1項に規定する中小企業者の場合 （2者以上の事業者が共同で実施するときはすべての者が中小企業者の場合）3分の2</p> <p>(イ) 補助事業者が(ア)以外の者で採択時の単年度当たりの事業費※が1億円超の場合 2分の1</p> <p>(ウ) 補助事業者が(ア)以外の者で採択時の単年度当たりの事業費※が1億円以下の場合 3分の1</p> <p>※1 単年度当たりの事業費の算出について単年度当たりの事業費は次により算出する。 ただし、事業費の対象は補助対象経費に限る。</p> <p>(1)複数年度計画の場合 複数年計画全体の事業費 ÷ 計画年度数 = 単年度当たりの事業費</p> <p>(2)単年度計画の場合 全体の事業費を単年度当たりの事業費とする。</p>

1. 補助事業	2. 補助対象経費	3. 基準額	4. 補助率
<p>途上国におけるエネルギー起源二酸化炭素排出抑制のための途上国向け低炭素技術のシステム化、複数技術パッケージ化等によるリノベーション・実証事業（廃棄物分野以外）</p>	<p>補助事業を行うために必要な工事費（本工事費、付帯工事費、機械器具費、測量及試験費）、設備費、業務費及び事務費であって別表第2に掲げる経費並びにその他必要な経費でセンターが承認した経費</p>	<p>センターが必要と認められた額</p>	<p>(ア) 補助事業者が中小企業基本法（昭和38年法律第154号）第2条第1項に規定する中小企業者の場合 （2者以上の事業者が共同で実施するときはすべての者が中小企業者の場合）3分の2 (イ) 補助事業者が(ア)以外の者で採択時の単年度当たりの事業費※が1億円超の場合2分の1 (ウ) 補助事業者が(ア)以外の者で採択時の単年度当たりの事業費※が1億円以下の場合3分の1 ※1 単年度当たりの事業費の算出について単年度当たりの事業費は次により算出する。 ただし、事業費の対象は補助対象経費に限る。 (1)複数年度計画の場合 複数年計画全体の事業費 ÷ 計画年度数 = 単年度当たりの事業費 (2)単年度計画の場合 全体の事業費を単年度当たりの事業費とする。</p>

別表第2

1 区分	2 費目	3 細分	4 内容
工事費	本工事費	(直接工事費) 材料費 労務費 直接経費 (間接工事費) 共通仮設費	<p>事業を行うために直接必要な材料の購入費をいい、これに要する運搬費、保管料を含むものとする。この材料単価は、建設物価（建設物価調査会編）、積算資料（経済調査会編）等を参考のうえ、事業の実施の時期、地域の実態及び他事業との関連を考慮して事業実施可能な単価とし、根拠となる資料を添付すること。</p> <p>本工事に直接必要な労務者に対する賃金等の人件費をいう。この労務単価は、毎年度農林水産、国土交通の2省が協議して決定した「公共工事設計労務単価表」を準用し、事業の実施の時期、地域の実態及び他事業との関連を考慮して事業実施可能な単価とし、根拠となる資料を添付すること。</p> <p>事業を行うために直接必要とする経費であり、次費用をいう。</p> <p>① 特許権使用料（契約に基づき使用する特許の使用料及び派出する技術者等に要する費用）、 ② 水道、光熱、電力料（事業を行うために必要な電力電灯使用料及び用水使用料）、 ③ 機械経費（事業を行うために必要な機械の使用に要する経費（材料費、労務費を除く。））</p> <p>次の費用をいう。</p> <p>① 事業を行うために直接必要な機械器具等の運搬、移動に要する費用、 ② 準備、後片付け整地等に要する費用、 ③ 機械の設置撤去及び仮道布設現道補修等に要する費用、 ④ 技術管理に要する費用、 ⑤ 交通の管理、安全施設に要する費用</p>

		現場管理費	請負業者が事業を行うために直接必要な現場経費であって、労務管理費、水道光熱費、消耗品費、通信交通費その他に要する費用をいい、類似の事業を参考に決定する。
		一般管理費	請負業者が事業を行うために直接必要な諸給与、法定福利費、修繕維持費、事務用品費、通信交通費をいい、類似の事業を参考に決定する。
	付帯工事費		本工事費に付随する直接必要な工事に要する必要最小限度の範囲で、経費の算定方法は本工事費に準じて算定すること。
	機械器具費		事業を行うために直接必要な建築用、小運搬用その他工事用機械器具の購入、借料、運搬、据付け、撤去、修繕及び製作に要する経費をいう。
	測量及試験費		事業を行うために直接必要な調査、測量、基本設計、実施設計、工事監理及び試験に要する経費をいう。また、間接補助事業者が直接、調査、測量、基本設計、実施設計、工事監理及び試験を行う場合においてこれに要する材料費、労務費、労務者保険料等の費用をいい、請負又は委託により調査、測量、基本設計、実施設計、工事監理及び試験を施工する場合においては請負費又は委託料の費用をいう。
設備費	設備費		事業を行うために直接必要な設備及び機器の購入並びに購入物の運搬、調整、据付け等に要する経費をいう。
業務費	業務費		事業を行うために直接必要な機器、設備又はシステム等に係る調査、設計、製作、試験及び検証に要する経費をいう。また、間接補助事業者が直接、調査、設計、製作、試験及び検証を行う場合においてこれに要する材料費、人件費、水道光熱費、消耗品費、通信交通費その他に要する費用をいい、請負又は委託により調査、設計、製作、試験及び検証を行う場合においては請負費又は委託料の費用をいう。

事務費	事務費	<p>事業を行うために直接必要な事務に要する社会保険料、賃金、諸謝金、旅費、需用費、役務費、委託料、使用料及賃借料、消耗品費及び備品購入費をいい、内容については別表第3に定めるものとする。</p> <p>事務費は、工事費、設備費及び業務費の金額に対し、次の表の区分毎に定められた率を乗じて得られた額の合計額の範囲内とする。</p>												
<table border="1"> <thead> <tr> <th data-bbox="469 560 536 654">号</th> <th data-bbox="536 560 1185 654">区 分</th> <th data-bbox="1185 560 1396 654">率</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td data-bbox="469 654 536 748">1</td> <td data-bbox="536 654 1185 748">5,000 万円以下の金額に対して</td> <td data-bbox="1185 654 1396 748">6. 5%</td> </tr> <tr> <td data-bbox="469 748 536 842">2</td> <td data-bbox="536 748 1185 842">5,000 万円を超え1 億円以下の金額に対して</td> <td data-bbox="1185 748 1396 842">5. 5%</td> </tr> <tr> <td data-bbox="469 842 536 936">3</td> <td data-bbox="536 842 1185 936">1 億円を超える金額に対して</td> <td data-bbox="1185 842 1396 936">4. 5%</td> </tr> </tbody> </table>			号	区 分	率	1	5,000 万円以下の金額に対して	6. 5%	2	5,000 万円を超え1 億円以下の金額に対して	5. 5%	3	1 億円を超える金額に対して	4. 5%
号	区 分	率												
1	5,000 万円以下の金額に対して	6. 5%												
2	5,000 万円を超え1 億円以下の金額に対して	5. 5%												
3	1 億円を超える金額に対して	4. 5%												

別表第3

1 区分	2 費目	3 細目	4 細分	5 内 容
事務費	事務費	社会保険料	社会保険料	この費目から支弁される事務手続のために必要な労務者に対する社会保険料と事業主負担保険料をいい、使途目的、人数、単価及び金額がわかる資料を添付すること。
		賃金		この費目から支弁される事務手続のために必要な労務者に対する給与をいい、雇用目的、内容、人数、単価、日数及び金額がわかる資料を添付すること。
		諸謝金		この費目から支弁される事務手続のために必要な諸謝金をいい、目的、人数、単価、回数が分かる資料を添付すること。
		旅費		この費目から支弁される事務手続のために必要な交通移動に係る経費をいい、目的、人数、単価、回数及び金額がわかる資料を添付すること。
		需用費	印刷製本費	この費目から支弁される事務手続のために必要な設計用紙等印刷、写真焼付及び図面焼増等に係る経費をいう。
		役務費	通信運搬費	この費目から支弁される事務手続のために必要な郵便料等通信費をいう。
		委託料		この費目から支弁される事務手続のために必要な業務の一部を外注する場合に発生する特殊な技能又は資格を必要とする業務に要する経費をいう。
		使用料及賃借料		この費目から支弁される事務手続のために必要な会議に係る会場使用料（借料）をいい、目的、回数及び金額がわかる資料を添付すること。
		消耗品費 備品購入費		この費目から支弁される事務手続のために必要な事務用品類、参考図書、現場用作業衣等雑具類の購入のために必要な経費をいい、使途目的、品目、単価、数量及び金額がわかる資料を添付すること。

別紙（第4、20条関係）

補助事業の実施に関する要件その他の必要な事項について

1 対象事業の要件

本補助事業においては、次に掲げる要件を全て満たす事業を対象とします。

ア) 対象とする低炭素技術の普及を図るパートナー国が下記のいずれかに該当すること。

①令和2年4月1日現在、JCMを構築している国：モンゴル、バングラデシュ、エチオピア、ケニア、モルディブ、ベトナム、ラオス、インドネシア、コスタリカ、パラオ、カンボジア、メキシコ、サウジアラビア、チリ、ミャンマー、タイ、フィリピン

※その後、本事業の実施期間中に新たにJCMが構築された場合、それらの国も含めます。

②①以外の途上国であって、JCMを構築する可能性がある国

※当該技術のリノベーション及び実証を行う場所について

対象とする低炭素技術の普及を図るパートナー国は上記①、②のとおりであるが、当該技術のリノベーション及び実証を行う場所は、原則として国内とする。しかし、国内では、気候等の環境や、規制及び資材の調達等の諸条件の違いのために、実証に必要な試験又は検証を行うことが難しい場合等、必要があると認められる場合は、当該実証については国外における実証も対象とする。国外で実施する場合、その必要性を申請様式に簡潔に記載すること。

イ) 対象とする低炭素技術が、下記の要件を全て満たすものであること。

①エネルギー起源CO₂の排出を削減するもの（再生可能エネルギー又は省エネルギーに関するものに限る）であること。CO₂以外の温室効果ガスのみを削減する技術や、エネルギー起源であることが明確でないCO₂の吸収や固定（大気中のCO₂の吸収等）に関する技術ではないこと。

②主要な要素となる技術について、研究段階ではなく、国内で実証されたものであること。

③対象とする国や地域において、当該技術に新規性があること。特に、本事業及び「途上国向け低炭素技術イノベーション創出事業」（平成26年度～平成30年度実施）において、当該国で類似した事業が採択されていないこと。

④対象とする国や地域において、当該技術に係る市場、需要、規制、慣習、資源制約等が日本国内と大きく異なるため、その普及のために、当該技術を用いた機器や設備の構成要素等の変更や再構築等のリノベーションが必要であること。

⑤将来的に国内への技術の還流及び国内のCO₂排出削減効果が見込まれること。

ウ) 原則として3年度以内で完了できる計画であること。

エ) パートナー国において、技術導入の基盤である現地人材の能力向上等に貢献し、パートナー国内での当該製品の持続的な市場創造につながると認められること。

オ) 本事業の補助により導入する設備等について、日本国からの他の補助金（補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律（昭和30年法律第179号。以下「適正化法」という。）第2条第1項に

規定する「補助金等」及び同条第4項に規定する「間接補助金等」をいう。)を受けていないこと。

2 補助金の交付を申請できる者

本事業について補助金の交付を申請できる者は、次に掲げる者とする。

- (1) 民間企業（外国の企業が会社法（平成17年法律第86号）に基づき設立する日本法人を含む）
- (2) 独立行政法人通則法（平成11年法律第103号）第2条第1項に規定する独立行政法人
- (3) 一般社団法人・一般財団法人及び公益社団法人・公益財団法人
- (4) その他環境大臣の承認を経てセンターが認める者

3 維持管理

補助事業により導入した設備等の取得財産は、第8条第十三号及び第十四号の規定に基づき、善良な管理者の注意をもって管理し、補助金の交付の目的に従って、その効率的運用を図ること。また、導入に関する各種法令を遵守すること。

4 二酸化炭素削減量の把握及び情報提供

補助事業者は、事業の実施による二酸化炭素排出削減量を把握し、この規程及びセンターの求めに応じて、事業の実施に係るこれらの情報を提供すること。

5 複数年事業を途中で廃止する場合

複数年で事業を完成させることを前提として採択された事業について、翌年度以降に事業を廃止する場合には、過年度に交付した補助金の一部又は全部に相当する額を納付させる場合がある。

交付規程様式等

第2章 令和2年度開始事業に係る規程関係

様式第1 交付申請書（第6条関係）

別紙1 実施計画書

別紙2 経費内訳

様式第2 変更交付申請書（第7条関係）

様式第3 交付決定通知書（第8条関係）

様式第4 変更交付決定通知書（第8条関係）

様式第5 計画変更承認申請書（第9条関係）

様式第6 中止（廃止）承認申請書（第9条関係）

様式第7 遅延報告書（第9条関係）

様式第8 遂行状況報告書（第9条関係）

様式第9 消費税及び地方消費税に係る仕入控除税額報告書（第9条関係）

様式第10 取得財産等管理台帳（第9条関係）

様式第11 財産譲渡報告書（第9条関係）

様式第12 完了実績報告書（第12条関係）

別紙1 実施報告書

別紙2 経費所要額精算調書

様式第13 年度終了実績報告書（第12条関係）

様式第14 交付額確定通知書（第13条関係）

様式第15 精算（概算）払請求書（第15条関係）

様式第16 事業報告書（第17条関係）

第3章 前年度からの継続事業に係る規程関係

様式第17 交付申請書（第22条関係）

別紙1 実施計画書

別紙2 経費内訳

様式第18 変更交付申請書（第23条関係）

様式第19 交付決定通知書（第24条関係）

様式第20 変更交付決定通知書（第24条関係）

様式第21 計画変更承認申請書（第25条関係）

様式第22 中止（廃止）承認申請書（第25条関係）

様式第23 遅延報告書（第25条関係）

様式第24 遂行状況報告書（第25条関係）

様式第25 消費税及び地方消費税に係る仕入控除税額報告書（第25条関係）

様式第26 取得財産等管理台帳（第25条関係）

様式第27 財産譲渡報告書（第25条関係）

様式第28 完了実績報告書（第28条関係）

別紙1 実施報告書

別紙2 経費所要額精算調書

様式第29 年度終了実績報告書（第28条関係）

様式第30 交付額確定通知書（第29条関係）

様式第31 精算（概算）払請求書（第31条関係）

様式第32 翌年度補助事業開始承認申請書（第33条関係）

様式第33 事業報告書（第34条関係）

様式第1 (第6条関係)

番 号
年 月 日

公益財団法人地球環境センター
理事長 鈴木 直 殿

申請者 住 所
氏名又は名称
代表者の職・氏名 印

令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金
(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業) 交付申請書

令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業)交付規程(以下「交付規程」という。)第6条の規定により上記補助金の交付について下記のとおり申請します。

なお、交付決定を受けて補助事業を実施する際には、補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律(昭和30年法律第179号)、補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律施行令(昭和30年政令第255号)及び交付規程の定めるところに従います。

記

1 事業名

2 補助事業の目的及び内容

別紙1 実施計画書のとおり

3 補助金交付申請額	金	円
(うち消費税及び地方消費税相当額	金	円)
令和2年度補助金交付申請額	金	円
(うち消費税及び地方消費税相当額	金	円)
令和3年度補助金交付申請額	金	円
(うち消費税及び地方消費税相当額	金	円)
令和4年度補助金交付申請額	金	円
(うち消費税及び地方消費税相当額	金	円)

4 補助事業に要する経費

別紙2 経費内訳のとおり

5 補助事業の開始及び完了予定年月日
交付決定の日 ～ 年 月 日

6 その他参考資料

注1 交付規程第4条第2項の規定に基づき共同で申請する場合は、代表事業者が申請すること。

2 「6 その他参考資料」として、申請者は、申請者の組織概要、経理状況説明書（直近の3決算期に関する貸借対照表及び損益計算書（申請時に、法人の設立から1会計年度を経過していない場合には、申請年度の事業計画及び収支予算、法人の設立から2会計年度を経過し、かつ、3会計年度を経過していない場合には、直近の2決算期に関する貸借対照表及び損益計算書））及び定款（申請者が個人企業の場合は、印鑑証明書の原本及び住民票の原本（いずれも発行後3ヶ月以内のもの））を添付すること（申請者が、法律に基づき設立の認可等を行う行政機関から、その認可等を受け、又は当該行政機関の合議制の機関における設立の認可等が適当である旨の文書を受領している者である場合は、設立の認可等を受け、又は設立の認可等が適当であるとされた法人の事業計画及び収支予算の案並びに定款の案を添付すること。ただし、これらの案が作成されていない場合には、添付を要しない。）。

3 別紙1又は別紙2において事業ごとに求めている設備等のシステム図・配置図・仕様書、補助事業に関する見積書・各種計算書、法律に基づく登録に係る通知の写し等を添付すること。

4 別紙2については、中小企業基本法第2条第1項に規定する中小企業者の場合は別紙2-1を、中小企業者以外の者の場合は別紙2-2または別紙2-3を使用すること。

※交付申請前にすでに提出されている書類については添付を省略して差し支えない。

別紙1

二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金
 (コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業) 実施計画書

事業名				
代表事業者名				
代表事業者 の担当者	事業実施の担当者 (責任者及び事業の窓口となる方)			
	氏名 (責任者)	部署名・役職名		所在地
				郵便番号
	電話番号	FAX 番号	E-mail アドレス	
	氏名 (窓口)	部署名・役職名		所在地
				郵便番号
	電話番号	FAX 番号	E-mail アドレス	
	氏名 (経理担当者)	部署名・役職名		所在地
				郵便番号
		電話番号	FAX 番号	E-mail アドレス
共同事業者	団体等の名称	事業実施責任者		
		氏名	部署・役職名	電話・FAX 番号
現地での協力者 (予定でも可)				
事業の主たる 実施場所	※技術開発を行う場所と実証場所が異なる場合は両方を記載すること。 ※実施場所の地図を掲載し、引用する出典を明記すること。			

<事業の実施体制>

※代表事業者、共同事業者、国内・国外での協力者などの関係や事業における役割を示す実施体制を記載すること。
※国際コンソーシアム体制の締結状況を記載すること

<本事業の目的・概要>

【概要】

※補助事業及び導入する設備等の概要（内容・規模等）について、簡潔に記入すること。（200字程度）

【背景・目的】

※本補助事業の目的を踏まえ、提案する技術に関連する国内外の技術開発・普及動向など、応募の背景について具体的かつ簡潔に記入すること。

※上記の背景を踏まえ、本事業の目的、事業期間中に直接的に達成すべき目標（アウトプット）を記入すること。

<技術及びリノベーションの内容>

【対象とする国・地域の概要】

※対象とする国、地域における対象とする低炭素技術分野の関係する制度、政策など政府の取組の状況及び現状での課題などを記入。

※当該国・地域の市場、需要、規制、慣習、資源制約など対象とする低炭素技術に関し、日本国内との諸事情、諸条件の違いについて記入するとともに、当該低炭素技術の現地における普及状況等を記入すること。

【対象とする低炭素技術の概要及び国内における活用状況】

※当該技術の適用分野、技術の概要、CO2 排出量削減効果、国内における実績（普及状況等）について記入すること

※「海外展開戦略（環境）」（平成 30 年 6 月制定）が対象としている分野との関係性についても説明すること。

【リノベーション及び実証の計画・方法】

※当該技術・製品を現地の事情に適合させるためのリノベーションの内容を具体的に示すとともに、実証の計画・方法について具体的に記述すること。

※目標とすべき価格や性能を、根拠を示し定量的に記載すること。

※実証を国外で実施する場合には、その必要性も簡潔に記載すること。

【対象とする国・地域における事業化・普及の見込み】

- ※現地での持続的な市場創造につながる現地人材の能力育成向上等への貢献についても記載すること。
- ※事業化の際の実施体制や資金調達計画等を示すこと。
- ※事業化する上で現在考えられるリスク・課題について記載すること。

【将来的な国内への技術還流及び国内のCO2削減効果への貢献の見込み】

【その他】

<事業の効果>

【CO2削減効果】

- (1) 事業による直接効果
- ・・・CO2トン/年

※本実証事業が完了し、その成果が事業化される際の一事業当たりの削減効果については以下の【CO2削減効果の算定根拠】により算定したCO2削減量を記載する。

【CO2削減効果の算定根拠】

※算出根拠となる計算式を記載し、さらに「算出根拠は別添のとおり」として「補助事業申請者向けハード対策事業計算ファイル」を添付すること。計算ファイルを作成する際は「地球温暖化対策事業効果算定ガイドブック<補助事業申請者用>（平成29年2月環境省地球環境局）」（以下「ガイドブック」という。）を熟読すること。ガイドブックと同時掲載の「補助事業申請者向けハード対策事業計算ファイル」は国内事業向けとなっているため、電力等のエネルギー種のCO2排出係数が固定値となっており、変更できない仕様になっている。本補助事業における計算には、対象とする国・地域によっては、国内とは異なるCO2排出係数を使ってCO2削減効果を計算する必要があるため、その場合は、GECウェブサイトの下記リンク先に掲載するCO2排出係数の変更可能な「補助事業申請者向けハード対策事業計算ファイル」を添付すること。

http://gec.jp/jp/innov_kobo2019_start/

なお、エクセルファイル（「補助事業申請者向けハード対策事業計算ファイル」）において記載する各々の設定根拠・引用元に係る具体的資料を添付すること。

【CO2削減コスト・算定根拠】

※【CO2削減効果】の「(1) 事業による直接効果」に記入したCO2削減量1トンを削減するために必要なコスト（円/tCO2）について、イニシャルコスト（総事業費÷法定耐用年数÷CO2削減量/年）及びランニングコスト（ランニングコスト（見込み）/年÷CO2削減量/年）の別に記入する。また、それらの算定根拠を記入する。

<事業費（概算）>

	令和2年度	令和3年度	令和4年度
工事費			
設備費			
業務費			
事務費			
合計			

※本事業期間が複数年にまたがる場合は、年度別の補助事業の事業費（概算）及び想定される経費区分・費目を記入する。

<資金計画>

※補助事業に要する経費を支払うための資金の調達計画及び調達方法を記入する。

<補助対象経費に含まれる設備・機器類の調達先>

補助対象経費に含まれる設備・機器等の中に、補助対象事業者自身から調達するものが

① 含まれる

・該当する設備・機器の名称：

(

)

② 含まれない

※いずれかに○を付け、①の場合には) に該当する設備・機器の名称を記入する。

<事業実施に関連する事項>

【他の補助金との関係】

※本補助金以外の国の補助金等（固定価格買取制度を含む。）への応募状況等を記入する。

【許認可、権利関係等事業実施の前提となる事項及び実施上問題となる事項】

※補助事業遂行上、許認可、権利関係等関係者間の調整が必要となる事項について記入する。

【設備の維持管理計画】

※導入する設備の事業期間及びその後の法定耐用年数の間の維持管理計画を記入する。

<事業実施スケジュール>

※事業の実施スケジュールを記入する。事業期間が複数年に亘る場合には、全工程を含めた実施スケジュールとし、事業内容と照らし合わせ、何をどこまで実施するのかが明らかに分かるように記入する。また、後年度負担額も参考記入する。

※実施スケジュールは別紙を添付してもよい。

注1 本計画書に、記入内容の根拠資料等を添付する。

注2 記入欄が少ない場合は、本様式を引き伸ばして使用する。

別紙2-1 (中小企業者)

二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金

(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業) に要する経費内訳

事業名 _____

所要経費	(1) 総事業費	(2) 寄付金その他の収入	(3) 差引額 (1) - (2)	(4) 補助対象経費 支出予定額
	円	円	円	円
	(5) 基準額	(6) 選定額 (4) と (5) を比較して少ない方の額	(7) 補助基本額 (3) と (6) を比較して少ない方の額	(8) 補助金所要額 (7) × 2/3 ※千円未満切捨て
	円	円	円	円

補助対象経費支出予定額内訳

経費区分・費目	金額 (円)				積算内訳
	1年目	2年目	3年目	合計	
(記載例)		○○	○○○	○○	材料名 (数量) × (単価) = 金額
工事費	○○○	○	○○○	○	
本工事費	○○○	○○○	○○○	○○	
材料費	○○	○○	○○○	○	
・	○	○		○○	
付帯工事費		○○○		○	
設備費					
業務費					
業務費					
事務費					
事務費					
共済費					
賃金					
・					
合計					

購入予定の主な財産の内訳 (一品、一組又は一式の価格が50万円以上のもの)

名称	仕様	数量	単	金額	購入予定時期

注 本内訳に、見積書又は計算書等を添付する。

別紙2-2 (中小企業者以外、単年度あたり1億円を超えるもの)

二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金

(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業) に要する経費内訳

事業名 _____

所要経費	(1) 総事業費	(2) 寄付金その他の収入	(3) 差引額 (1) - (2)	(4) 補助対象経費 支出予定額
	円	円	円	円
	(5) 基準額	(6) 選定額 (4) と (5) を比較して少ない方の額	(7) 補助基本額 (3) と (6) を比較して少ない方の額	(8) 補助金所要額 (7) × 1/2 ※千円未満切捨て
	円	円	円	円

補助対象経費支出予定額内訳

経費区分・費目	金額 (円)				積算内訳
	1年目	2年目	3年目	合計	
(記載例)		○○	○○○	○○	材料名 (数量) × (単価) = 金額
工事費	○○○	○	○○○	○	
本工事費	○○○	○○○	○○○	○○	
材料費	○○	○○	○○○	○	
付帯工事費	○	○			
付帯工事費		○○○			
設備費					
業務費					
業務費					
事務費					
事務費					
共済費					
賃金					
合計					

購入予定の主な財産の内訳 (一品、一組又は一式の価格が50万円以上のもの)

名称	仕様	数量	単価	金額	購入予定時期

注 本内訳に、見積書又は計算書等を添付する。

別紙 2-3 (中小企業者以外、単年度あたり 1 億円以下)

二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金

(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業) に要する経費内訳

事業名 _____

所要経費	(1) 総事業費	(2) 寄付金その他の収入	(3) 差引額 (1) - (2)	(4) 補助対象経費 支出予定額
	円	円	円	円
	(5) 基準額	(6) 選定額 (4) と (5) を比較し て少ない方の額	(7) 補助基本額 (3) と (6) を比較し て少ない方の額	(8) 補助金所要額 (7) × 1/3 ※千円未満切捨て
	円	円	円	円

補助対象経費支出予定額内訳

経費区分・費目	金額 (円)				積算内訳
	1 年目	2 年目	3 年目	合計	
(記載例)		○○	○○○	○○	材料名 (数量) × (単価) = 金額
工事費	○○○	○	○○○	○	
本工事費	○○○	○○○	○○○	○○	
材料費	○○	○○	○○○	○	
付帯工事費	○	○			
設備費		○○○			
業務費					
業務費					
事務費					
事務費					
共済費					
賃金					
合 計					

購入予定の主な財産の内訳 (一品、一組又は一式の価格が 50 万円以上のもの)

名 称	仕様	数量	単 価	金 額	購入予定時期

注 本内訳に、見積書又は計算書等を添付する。

様式第2（第7条関係）

番 号
年 月 日

公益財団法人地球環境センター
理事長 鈴木 直 殿

補助事業者 住 所
氏名又は名称
代表者の職・氏名 印

令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金
(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業) 変更交付申請書

年 月 日付け 第 号で交付決定の通知を受けた二酸化炭素
排出抑制対策事業費等補助金（コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普
及事業）を下記のとおり変更したいので、令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補
助金（コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業）交付規程（以下
「交付規程」という。）第7条の規定により関係書類を添えて申請します。

なお、変更交付決定を受けて補助事業を実施する際には、補助金等に係る予算の執行の
適正化に関する法律（昭和30年法律第179号）、補助金等に係る予算の執行の適正化
に関する法律施行令（昭和30年政令第255号）及び交付規程の定めるところに
従います。

記

1 事業名

2 補助金変更申請額 金 円

3 変更内容

4 変更理由

(注) 具体的に記載する。

注1 交付規程第4条第2項の規定に基づき共同で交付申請した場合は、代表事業者が
申請すること。

2 2の金額欄の上部に（ ）書きで当初交付決定額を記載する。

3 添付書類は、様式第1のそれぞれに準じて変更部分について作成することとし、
別紙2については、変更前の金額を上段に（ ）書きし、変更後の金額を下段に記載
すること。

様式第3（第8条関係）

番 号

令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金
（コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業）交付決定通知書

補助事業者 殿

年 月 日付け 第 号で交付申請のあった令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金（コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業）については、令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金（コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業）交付規程（ 年 月 日 第 号。以下「交付規程」という。）第8条第1項の規定により、下記のとおり交付することを決定したので、通知する。

年 月 日

公益財団法人地球環境センター 理事長 鈴木 直 印

記

- 1 事業名
- 2 補助金の交付の対象となる事業及びその内容は、 年 月 日付け 第 号交付申請書のとおりである。
- 3 補助基本額及び補助金の額は次のとおりである。ただし、事業の内容を変更する場合において、補助基本額又は補助金の額が変更されるときは、別に通知するところによる。

補助基本額 金	円	補助金の額 金	円
令和2年度 補助基本額 金	円	補助金の額 金	円
令和3年度 補助基本額 金	円	補助金の額 金	円
令和4年度 補助基本額 金	円	補助金の額 金	円
- 4 事業に要する経費の区分ごとの配分及びこれに対応する補助金の額は、 年 月 日付け 第 号交付申請書記載のとおりである。
- 5 事業内容の変更等特段の事情がない限り、交付を行う補助金の額は、この交付決定額を上限とする。
- 6 補助事業者は、補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律（昭和30年法律第179号）、補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律施行令（昭和30年政令第255号）、二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金（コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業）交付要綱（ 年 月 日環 第 号）、二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金（コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業）実施要領（ 年 月 日環 第 号）及び交付規程に従わなければならない。
- 7 この交付決定に対し不服があるとき、申請の取り下げをすることができる期限は 年 月 日とする。
- 8 補助事業における仕入れに係る消費税等については、交付規程第5条第2項ただし書の定めるところにより算定されている場合は、補助金の額の確定又は消費税の申告後において精算減額又は返還を行うこととする。

様式第4（第8条関係）

番 号

令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金
（コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業）変更交付決定通知書

補助事業者 殿

年 月 日付け 第 号で変更交付申請のあった令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金（コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業）については、令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金（コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業）交付規程（ 年 月 日 第 号。以下「交付規程」という。）第8条第1項の規定により、 年 月 日付け 第 号で交付決定した内容を下記のとおり変更することを決定したので通知する。

令和 年 月 日

公益財団法人地球環境センター 理事長 鈴木 直 印

記

- 事業名
- 補助金の交付の対象となる事業及びその内容は、 年 月 日付け 第 号変更交付申請書のとおりである。
- 変更後の補助金の額は、次のとおりである。

変更前補助基本額 金	円	変更前補助金の額 金	円
変更後補助基本額 金	円	変更後補助金の額 金	円
増 減 額 金	円	増 減 額 金	円
変更後の補助基本額及び補助金の額			
令和2年度 補助基本額 金	円	補助金の額 金	円
令和3年度 補助基本額 金	円	補助金の額 金	円
令和4年度 補助基本額 金	円	補助金の額 金	円
- 事業に要する経費の区分ごとの配分及びこれに対応する変更後の補助金の額は、 年 月 日付け 第 号変更交付申請書記載のとおりである。
- 補助事業者は、補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律（昭和30年法律第179号）、補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律施行令（昭和30年政令第255号）、二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金（コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業）交付要綱（ 年 月 日 第 号）、二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金（コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業）実施要領（ 年 月 日 第 号）及び交付規程に従わなければならない。
- この交付決定に対し不服があるとき、申請の取り下げをすることができる期限は 年 月 日とする。
- 補助事業における仕入れに係る消費税等については、交付規程第5条第2項ただし書の定めるところにより算定されている場合は、補助金の額の確定又は消費税の申告後において精算減額又は返還を行うこととする。

様式第5（第9条関係）

番 号
年 月 日

公益財団法人地球環境センター
理事長 鈴木 直 殿

補助事業者 住 所
氏名又は名称
代表者の職・氏名

印

令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金
（コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業）計画変更承認申請書

年 月 日付け 第 号で交付決定の通知を受けた二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金（コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業）の計画を下記のとおり変更したいので、令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金（コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業）交付規程（以下「交付規程」という。）第9条第三号の規定により関係書類を添えて申請します。

なお、計画変更の承認を受けて補助事業を実施する際には、補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律（昭和30年法律第179号）、補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律施行令（昭和30年政令第255号）及び交付規程の定めるところに従います。

記

- 1 事業名
- 2 変更の内容
- 3 変更を必要とする理由
- 4 変更が補助事業に及ぼす影響

- 注1 交付規程第4条第2項の規定に基づき共同で交付申請した場合は、代表事業者が申請すること。
- 2 事業の内容を変更する場合にあつては、様式第1の別紙1に変更後の内容を記載して添付すること。
 - 3 経費の配分を変更する場合にあつては、様式第1の別紙2に変更前の金額を上段に（ ）書きし、変更後の金額を下段に記載して添付すること。

様式第6（第9条関係）

番 号
年 月 日

公益財団法人地球環境センター
理 事 長 鈴木 直 殿

補助事業者 住 所
氏名又は名称
代表者の職・氏名 印

令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金
（コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業）
中止（廃止）承認申請書

年 月 日付け 第 号で交付決定の通知を受けた二酸化炭素
排出抑制対策事業費等補助金（コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普
及事業）を下記のとおり中止（廃止）したいので、令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事
業費等補助金（コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業）交付規
程（以下「交付規程」という。）第9条第四号の規定により関係書類を添えて申請します。

記

- 1 事業名
- 2 中止（廃止）を必要とする理由
- 3 中止（廃止）の予定年月日
- 4 中止（廃止）までに実施した事業内容
- 5 中止（廃止）が補助事業に及ぼす影響
- 6 中止（廃止）後の措置

注1 交付規程第4条第2項の規定に基づき共同で交付申請した場合は、代表事業者が
申請すること。

- 2 中止（廃止）までに実施した事業の内容については、様式第1の別紙1を使用し
記載するとともに、様式第1の別紙2に交付決定額を上段に（ ）書きし、中止
（廃止）時の実施見込額を下段に記載した書類を添付すること。

様式第7（第9条関係）

番 号
年 月 日

公益財団法人地球環境センター
理事長 鈴木 直 殿

補助事業者 住 所
氏名又は名称
代表者の職・氏名 印

令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金
(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業) 遅延報告書

年 月 日付け 第 号で交付決定の通知を受けた二酸化炭素
排出抑制対策事業費等補助金（コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普
及事業）の遅延について、令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金（コ・イノ
ベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業）交付規程（以下「交付規程」とい
う。）第9条第五号の規定により下記のとおり指示を求めます。

記

- 1 事業名
- 2 遅延の原因及び内容
- 3 遅延に係る金額 金 円
- 4 遅延に対して採った措置
- 5 遅延等が補助事業に及ぼす影響
- 6 補助事業の実施予定及び完了予定年月日
遅延部分の完了予定： 年 月 日
(補助事業の完了予定： 年 月 日)

注1 交付規程第4条第2項の規定に基づき共同で交付申請した場合は、代表事業者が
報告すること。

2 事業の進捗状況を示した工程表を、当初と変更後を対比できるように作成し添付
すること。

様式第8（第9条関係）

番 号
年 月 日

公益財団法人地球環境センター
理 事 長 鈴木 直 殿

補助事業者 住 所
氏名又は名称
代表者の職・氏名 印

令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金
(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業) 遂行状況報告書

年 月 日付け 第 号で交付決定の通知を受けた二酸化炭素
排出抑制対策事業費等補助金（コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普
及事業）の遂行状況について、令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金（コ・
イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業）交付規程（以下「交付規程」
という。）第9条第六号の規定により下記のとおり報告します。

記

事業名 _____

経費の区分	交付決定額(円)	実施額(円)	遂行状況
計			

注 交付規程第4条第2項の規定に基づき共同で交付申請した場合は、代表事業者が報告
すること。

様式第9(第9条関係)

番 号
年 月 日

公益財団法人地球環境センター
理 事 長 鈴木 直 殿

補助事業者 住 所
氏名又は名称
代表者の職・氏名 印

令和2年度消費税及び地方消費税に係る仕入控除税額報告書

年 月 日付け 第 号で交付決定の通知を受けた二酸化炭素
排出抑制対策事業費等補助金(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普
及事業)について、令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金(コ・イノベーシ
ョンによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業)交付規程(以下「交付規程」という。)
第9条第十号の規定に基づき下記のとおり報告します。

記

- 1 事業名
- 2 補助金額(交付規程第13条第1項による額の確定額)
金 円
- 3 消費税及び地方消費税の申告により確定した消費税及び地方消費税に係る仕入控除
税額
金 円

注1 交付規程第4条第2項の規定に基づき共同で交付申請した場合は、代表事業者が
報告すること。

2 別紙として積算の内容を添付すること。

様式第10(第9条関係)

二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金
(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業) 取得財産等管理台帳
(年度)

事業名

財産名 (備品等名)	規格	数量	単価 (円)	金額 (円)	取得 年月日	耐用 年数	設置又は 保管場所

注1 対象となる取得財産等は、取得価格又は効用の増加価格が二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業)交付規程第9条第十四号に規定する処分制限額以上の財産とする。

2 数量は、同一規格等であれば一括して記載して差し支えない。単価が異なる場合は、分割して記載すること。

3 取得年月日は、検収年月日を記載すること。

様式第11 (第9条関係)

番 号
年 月 日

公益財団法人地球環境センター
理 事 長 殿

補助事業者 住 所
氏名又は名称
代表者の職・氏名 印

令和2年度
二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金
(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業)
により取得した設備に係る譲渡の報告について

標記について、令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業) 交付規程第8条第十四号に基づき、次の譲渡について報告します。

事業名：

事業名：

1 譲渡の種類 (該当するものに○)

(有償譲渡 無償譲渡)

2 譲渡の概要

①補助事業者		②設備名		③所在地	
④設備種別			⑤設備構造		
⑥補助相当額 (処分に係る部分の額)	⑦補助額全体	⑧総事業費	⑨補助年度	⑩処分制限期間	⑪経過年数
円	円	円	年度	年	年
⑫譲渡付の内容				⑬譲渡予定年月日	

3 経緯及び譲渡の理由

--

4 添付資料

- ・対象設備の図面及び写真
- ・補助金交付決定通知書及び確定通知書の写し (保管されてない場合は交付額を確認できる決算書でも可)
- ・共同事業者が譲渡を受けた設備を用いて実施する事業の事業計画
- ・その他参考となる資料

(記入要領)

1 譲渡の種類

いずれか該当するものを○で囲むこと。

譲渡：取得財産等の所有者の変更。

2 譲渡の概要

- (1) 「④設備種別」欄には、補助金交付額確定時の補助対象設備名又は補助事業に係る設備名を記載すること。
- (2) 「⑤設備構造」欄には、減価償却資産の耐用年数等に関する省令（昭和40年大蔵省令15号）別表第1の「構造又は用途」欄及び「細目」欄又は別表第2の「設備の種類」欄及び「細目」欄のうち該当するものを記入すること。
- (3) 「⑫譲渡の内容」欄には、次の例のように、譲渡の内容を簡潔に記載すること。
例：〇〇法人〇〇に譲渡し、同一事業で継続。

3 経緯及び譲渡の理由

譲渡をするに至った経緯と理由を記載すること。

4 添付書類

- (1) 対象設備の全部を譲渡する場合には、対象設備の図面や写真は添付しなくても構わない。
- (2) 補助対象設備の建設工事完了の検査済証、備品納品書、補助対象設備の事業廃止を証明する資料など、経過期間の確認ができる資料の写しを必ず添付すること。
- (3) その他参考となる資料については、「2 譲渡の概要」の各欄の記載事項の根拠や「3 経緯及び譲渡の理由」を補足する資料を添付すること。

公益財団法人地球環境センター
理事長 鈴木 直 殿

補助事業者 住 所
氏名又は名称
代表者の職・氏名 印

令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金
(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業) 完了実績報告書

年 月 日付け 第 号で交付決定の通知を受けた二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業)を完了(中止・廃止)しましたので、令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業)交付規程(以下「交付規程」という。)第12条第1項の規定に基づき下記のとおり報告します。

記

- 1 事業名
- 2 補助金の交付決定額及び交付決定年月日
金 円(年 月 日 番号)
(うち消費税及び地方消費税相当額 金 円)
- 3 補助事業の実施状況
別紙1 実施報告書のとおり
- 4 補助金の経費収支実績
別紙2 経費所要額精算調書のとおり
- 5 補助事業の実施期間
年 月 日 ~ 年 月 日
- 6 添付資料
(1) 完成図書(各種手続等に係る書面の写しを含む。)
(2) 写真(工程等が分かるもの)
(3) その他参考資料(領収書等含む。)

注1 交付規程第4条第2項の規定に基づき共同で交付申請した場合は、代表事業者が報告すること。

2 別紙2については、中小企業者の場合は別紙2-1を、中小企業基本法第2条第1項に規定する中小企業者以外の者の場合は金額に応じ別紙2-2又は2-3を使用すること。

別紙1

二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金
(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業) 実施報告書

事業名				
代表事業者名				
代表事業者 の担当者	事業実施の担当者（責任者及び事業の窓口となる方）			
	氏名（責任者）	部署名・役職名		所在地
				郵便番号
	電話番号	FAX 番号	E-mail アドレス	
	氏名（窓口）	部署名・役職名		所在地
				郵便番号
	電話番号	FAX 番号	E-mail アドレス	
	氏名（経理担当者）	部署名・役職名		所在地
				郵便番号
		電話番号	FAX 番号	E-mail アドレス
共同事業者	団体等の名称	事業実施責任者		
		氏名	部署・役職名	電話・FAX 番号
				所在地・E-mail アドレス
現地での協力者 (予定でも可)				
事業の主たる 実施場所	※技術開発を行う場所と実証場所が異なる場合は両方を記載すること			

<事業の実施体制>

※代表事業者、共同事業者、国内・国外での協力者などの関係や事業における役割を示す実施体制を記載すること。

<本事業の目的・概要>

【概要】

※補助事業及び導入する設備等の概要（内容・規模等）について、簡潔に記入すること。（200字程度）

【背景・目的】

※本補助事業の目的を踏まえ、提案する技術に関連する国内外の技術開発・普及動向など、応募の背景について具体的かつ簡潔に記入すること。

※上記の背景を踏まえ、本事業の目的、事業期間中に直接的に達成すべき目標（アウトプット）を記入すること。

<技術及びリノベーションの内容>

【対象とする国・地域の概要】

※対象とする国、地域における対象とする低炭素技術分野の関係する制度、政策など政府の取組の状況及び現状での課題などを記入。

※当該国・地域の市場、需要、規制、慣習、資源制約など対象とする低炭素技術に関し、日本国内との諸事情、諸条件の違いについて記入するとともに、当該低炭素技術の現地における普及状況等を記入すること。

【対象とする低炭素技術の概要及び、国内における活用状況】

※当該技術の適用分野、技術の概要、CO2 排出量削減効果、国内における実績（普及状況等）について記入すること

※「海外展開戦略（環境）」（平成 30 年 6 月制定）が対象としている分野との関係性についても説明すること。

【リノベーション及び実証の計画・方法・成果】

※当該技術・製品を現地の事情に適合させるためのリノベーションの内容を具体的に示すとともに、実証の計画・方法・成果について具体的に記述すること。

※目標とすべき価格や性能を、根拠を示し定量的に記載すること。

※今年度の実証の実績と成果について、定量的に示すこと。

※実証を国外で実施した場合には、その必要性も簡潔に記載すること。

【対象とする国・地域における事業化・普及の見込み】

※現地での持続的な市場創造につながる現地人材の能力育成向上等への貢献についても記載すること。

※事業化の際の実施体制や資金調達の計画等を示すこと。

※事業化する上で現在考えられるリスク・課題について記載すること。

【将来的な国内への技術還流及び国内のCO2削減効果への貢献の見込み】

【その他】

<事業の効果>

【CO2削減効果】

(1) 事業による直接効果

・・・CO2トン/年

※本実証事業が完了し、その成果が事業化される際の一事業当たりの削減効果については以下の【CO2削減効果の算定根拠】により算定したCO2削減量を記載する。

【CO2削減効果の算定根拠】

※算出根拠をとなる計算式を記載し、さらに「算出根拠は別添のとおり」として「補助事業申請者向けハード対策事業計算ファイル」を添付すること。計算ファイルを作成する際は「地球温暖化対策事業効果算定ガイドブック<補助事業申請者用>（平成29年2月環境省地球環境局）」（以下「ガイドブック」という。）を熟読すること。ガイドブックと同時掲載の「補助事業申請者向けハード対策事業計算ファイル」は国内事業向けとなっているため、電力等のエネルギー種のCO2排出係数が固定値となっており、変更できない仕様になっている。本補助事業における計算には、対象とする国・地域によっては、国内とは異なるCO2排出係数を使ってCO2削減効果を計算する必要があるため、その場合は、GECウェブサイトの下記リンク先に掲載するCO2排出係数の変更可能な「補助事業申請者向けハード対策事業計算ファイル」を添付すること。

http://gec.jp/jp/innov_kobo2019_start/

なお、エクセルファイル（「補助事業申請者向けハード対策事業計算ファイル」）において記載する各々の設定根拠・引用元に係る具体的資料を添付すること。

【CO2削減コスト・算定根拠】

※【CO2削減効果】の「(1) 事業による直接効果」に記入したCO2削減量1トンを削減するために必要なコスト（円/tCO2）について、イニシャルコスト（総事業費÷法定耐用年数÷CO2削減量/年）及びランニングコスト（ランニングコスト（見込み）/年÷CO2削減量/年）の別に記入する。また、それらの算定根拠を記入する。

<事業費（概算）>

	令和2年度	令和3年度	令和4年度
工事費			
設備費			
業務費			
事務費			
合計			

※本事業期間が複数年にまたがる場合は、年度別の補助事業の事業費（概算）及び想定される経費区分・費目を記入する。（完了した年度は実績値を記入する。）

<資金計画>

※補助事業に要する経費を支払うために調達した資金の調達方法を記入する。

<補助対象経費に含まれる設備・機器類の調達先>

補助対象経費に含まれる設備・機器等の中に、補助対象事業者自身から調達したものが

① 含まれる

・該当する設備・機器の名称：

(

)

② 含まれない

※いずれかに○を付け、①の場合には) に該当する設備・機器の名称を記入する。

<事業実施に関連する事項>

【他の補助金との関係】

※本補助金以外の国の補助金等（固定価格買取制度を含む。）への応募状況等を記入する。

【許認可、権利関係等事業実施の前提となる事項及び実施上問題となる事項】

※補助事業遂行上、許認可、権利関係等関係者間の調整が必要であった事項について記入する。

【設備の維持管理計画】

※導入した設備の事業期間及びその後の法定耐用年数の間の維持管理計画を記入する。

<事業実施スケジュール>

※事業の実施スケジュールを記入する。事業期間が複数年に亘る場合には、全工程を含めた実施スケジュールとし、事業内容と照らし合わせ、何をどこまで実施できたのかが明らかに分かるように記入する。また、後年度負担額も参考記入する。

※実施スケジュールは別紙を添付してもよい。

注1 本計画書に、記入内容の根拠資料等を添付する。

注2 記入欄が少ない場合は、本様式を引き伸ばして使用する。

別紙2-1 (中小企業者)

二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金

(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業) に要する経費所要額精算調書

事業名 _____

1. 経費実績額

(1) 総事業費	(2) 寄付金その他の収入	(3) 差引額 (1) - (2)	(4) 補助対象経費 実支出額	(5) 基準額
円	円	円	円	円
(6) 選定額 (4) と (5) を比較して 少ない方の額	(7) 補助基本額 (3) と (6) を比較して 少ない方の額	(8) 補助金所要額 (7) × 2/3 ※千円未満切捨て	(9) 補助金交付決定額	(10) 過不足額 (9) - (8)
円	円	円	円	円

2. 補助対象経費実支出額内訳

経費区分・費目	金額 (円)				積算内訳
	1年目	2年目	3年目	合計	
(記載例)		○○	○○	○○	材料名 (数量) × (単価) = 金額
工事費	○○○	○	○	○	
本工事費	○○○	○○	○○○	○○○	
材料費	○○	○	○○		
・	○	○○○	○		
・		○○	○○○		
付帯工事費		○			
・					
・					
機械器具費					
車両購入費					
事務費					
共済費					
賃金					
・					
合計					

購入した主な財産の内訳 (一品、一組又は一式の価格が50万円以上のもの)

名称	仕様	数量	単価	金額	購入時期

注 本調書に、請求書、領収書又は計算書等を添付する。

別紙2-2 (中小企業者以外、単年度あたり1億円を超えるもの)

二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金

(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業) に要する経費所要額精算調書

事業名 _____

1. 経費実績額

(1) 総事業費	(2) 寄付金その他の収入	(3) 差引額 (1) - (2)	(4) 補助対象経費 実支出額	(5) 基準額
円	円	円	円	円
(6) 選定額 (4)と(5)を比較して少ない方の額	(7) 補助基本額 (3)と(6)を比較して少ない方の額	(8) 補助金所要額 (7) × 1/2 ※千円未満切捨て	(9) 補助金交付決定額	(10) 過不足額 (9) - (8)
円	円	円	円	円

2. 補助対象経費実支出額内訳

経費区分・費目	金額 (円)				積算内訳
	1年目	2年目	3年目	合計	
(記載例)		○○	○○	○○	材料名 (数量) × (単価) = 金額
工事費	○○○	○	○	○	
本工事費	○○○	○○	○○○	○○○	
材料費	○○	○	○○		
・	○	○○○	○		
・		○○	○○○		
付帯工事費		○			
・					
・					
機械器具費					
車両購入費					
事務費					
共済費					
賃金					
・					
合計					

購入した主な財産の内訳 (一品、一組又は一式の価格が50万円以上のもの)

名称	仕様	数量	単価	金額	購入時期

注 本調書に、請求書、領収書又は計算書等を添付する。

別紙2-3 (中小企業者以外、単年度あたり1億円以下)

二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金

(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業) に要する経費所要額精算調書

事業名 _____

1. 経費実績額

(1) 総事業費	(2) 寄付金その他の収入	(3) 差引額 (1) - (2)	(4) 補助対象経費 実支出額	(5) 基準額
円	円	円	円	円
(6) 選定額 (4)と(5)を比較して少ない方の額	(7) 補助基本額 (3)と(6)を比較して少ない方の額	(8) 補助金所要額 (7) × 1/3 ※千円未満切捨て	(9) 補助金交付決定額	(10) 過不足額 (9) - (8)
円	円	円	円	円

2. 補助対象経費実支出額内訳

経費区分・費目	金額 (円)				積算内訳
	1年目	2年目	3年目	合計	
(記載例)		○○	○○	○○	材料名 (数量) × (単価) = 金額
工事費	○○○	○	○	○	
本工事費	○○○	○○	○○○	○○○	
材料費	○○	○	○○		
・	○	○○○	○		
・		○○	○○○		
付帯工事費		○			
・					
・					
機械器具費					
車両購入費					
事務費					
共済費					
賃金					
・					
合計					

購入した主な財産の内訳 (一品、一組又は一式の価格が50万円以上のもの)

名称	仕様	数量	単価	金額	購入時期

注 本調書に、請求書、領収書又は計算書等を添付する。

様式第13（第12条関係）

番 号
年 月 日

公益財団法人地球環境センター
理事長 鈴木 直 殿

補助事業者 住 所
氏名又は名称
代表者の職・氏名 印

令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金
(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業) 年度終了実績報告書

年 月 日付け 第 号で交付決定の通知を受けた二酸化炭素
排出抑制対策事業費等補助金(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普
及事業)の令和2年度における実績について、令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費
等補助金(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業)交付規程(以
下「交付規程」という。)第12条第2項の規定に基づき下記のとおり報告します。

記

1 事業名

2 補助金の交付決定額及び交付決定年月日

金 円(年 月 日 番号)
(うち消費税及び地方消費税相当額 金 円)

3 補助事業の実施状況

※交付規程第9条第五号の規定に基づきセンターの指示を受けた場合は、翌会計年度
に行う補助事業に関する計画を含む。

4 補助金の経費所要額実績

別紙のとおり

経費所要額実績

事業名 _____

(単位：円)

交付決定の内容		年度内遂行実績		翌年度繰越額	
(1)補助事業に 要する経費	(2)交付決定額	(3)事業費 支払実績額	(4)補助金 受入額	(5)補助事業に 要する経費 (1) - (3)	(6)補助金 所要額 (2) - (4)

令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金
（コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業） 交付額確定通知書

補助事業者 殿

年 月 日付け 第 号で交付決定した二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金（コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業）については、年 月 日付けの完了実績報告書に基づき、下記のとおり交付額を確定したので、二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金（コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業）交付規程（年 月 日付け 第 号。以下「交付規程」という。）第13条第1項の規定により通知する。

年 月 日

公益財団法人地球環境センター
理事長 鈴木 直

記

事業名

確定額 金 円

（超過交付額が生じた場合）

なお、超過交付となった金 円については、交付規程第13条第2項及び第3項の規定により 年 月 日までに返還することを命ずる。

様式第15（第15条関係）

番 年 月 日 号

公益財団法人地球環境センター
理事長 鈴木 直 殿

補助事業者 住 所
氏名又は名称
代表者の職・氏名

印

令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金
(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業) 精算(概算) 払請求書

年 月 日付け 第 号で交付額確定(交付決定)の通知を受けた二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業)の精算払(概算払)を受けたいので、令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業)交付規程(以下「交付規程」という。)第15条第2項の規定に基づき下記のとおり請求します。

記

- 1 事業名
2 請求金額 金 円
3 請求金額の内訳

(概算払の場合)

(単位:円)

経費区分	交付決定額 ①	支出費用状況			概算払 受領済額 ⑤	差引請求額 ④-⑤
		実績額 ②	見込額 ③	合計 ④=②+③		
計						

(精算払の場合)

(単位:円)

交付決定額	確定額 ①	概算払受領済額 ②	差引請求額 ①-②

- 4 振込先の金融機関、その支店名、預金の種別、口座番号及び名義
5 概算払を必要とする理由(概算払の請求をするときに限る。)

注 交付規程第4条第2項の規定に基づき共同で交付申請した場合は、代表事業者が請求すること。

様式第16 (第17条関係)

番 号
年 月 日

環 境 大 臣 殿

補助事業者 住 所
氏名又は名称
代表者の職・氏名

令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金
(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業)
年度 事業報告書

年 月 日付け 第 号で交付決定の通知を受けた二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業)について、令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業)交付規程(以下「交付規程」という。)第17条第1項の規定に基づき下記のとおり報告します。

記

- 1 事業名
- 2 事業実施による二酸化炭素排出削減効果について
 - (1) 年度二酸化炭素排出削減量(実績)
 - (2) 実績報告書における二酸化炭素排出削減量に達しなかった場合の原因
 - (3) 事業による成果の活用状況 ※事業化の状況や事業化に向けた検討状況等

注 様式第16は参考書式であり、事務の簡素化の観点から、任意の様式・提出方法を指定する場合がある。

注 交付規程第4条第2項の規定に基づき共同で交付申請した場合は、代表事業者が報告すること。

様式第17（第22条関係）

番 号
年 月 日

公益財団法人地球環境センター
理事長 鈴木 直 殿

申請者 住 所
氏名又は名称
代表者の職・氏名 印

令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金
(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業) 交付申請書

令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金（コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業）交付規程（以下「交付規程」という。）第22条の規定により上記補助金の交付について下記のとおり申請します。

なお、交付決定を受けて補助事業を実施する際には、補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律（昭和30年法律第179号）、補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律施行令（昭和30年政令第255号）及び交付規程の定めるところに従います。

記

- 1 事業名
- 2 補助事業の目的及び内容
別紙1 実施計画書のとおり
- 3 補助金交付申請額 金 円
(うち消費税及び地方消費税相当額 金 円)
- 4 補助事業に要する経費
別紙2 経費内訳のとおり
- 5 補助事業の開始及び完了予定年月日
交付決定の日 ～ 年 月 日
- 6 その他参考資料

- 注1 交付規程第20条第3項の規定に基づき共同で申請する場合は、代表事業者が申請すること。
- 2 「6 その他参考資料」として、申請者は、申請者の組織概要、経理状況説明書（直近の3決算期に関する貸借対照表及び損益計算書（申請時に、法人の設立から1会計年度を経過していない場合には、申請年度の事業計画及び収支予算、法人の設立から2会計年度を経過し、かつ、3会計年度を経過していない場合には、直近の2決算期に関する貸借対照表及び損益計算書））及び定款（申請者が個人企業の場合は、印鑑証明書の原本及び住民票の原本（いずれも発行後3ヶ月以内のもの））を添付すること（申請者が、法律に基づき設立の認可等を行う行政機関から、その認可等を受け、又は当該行政機関の合議制の機関における設立の認可等が適当である旨の文書を受領している者である場合は、設立の認可等を受け、又は設立の認可等が適当であるとされた法人の事業計画及び収支予算の案並びに定款の案を添付すること。ただし、これらの案が作成されていない場合には、添付を要しない。）。
 - 3 別紙1又は別紙2において事業ごとに求めている設備等のシステム図・配置図・仕様書、補助事業に関する見積書・各種計算書、法律に基づく登録に係る通知の写し等を添付すること。
 - 4 別紙2については、中小企業基本法第2条第1項に規定する中小企業者の場合は別紙2-1を、中小企業者以外の者の場合は別紙2-2または別紙2-3を使用すること。

※交付申請前にすでに提出されている書類については添付を省略して差し支えない。

別紙1

二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金
(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業) 実施計画書

事業名				
代表事業者名				
代表事業者 の担当者	事業実施の担当者（責任者及び事業の窓口となる方）			
	氏名（責任者）	部署名・役職名		所在地
				郵便番号
	電話番号	FAX 番号	E-mail アドレス	
	氏名（窓口）	部署名・役職名		所在地
				郵便番号
	電話番号	FAX 番号	E-mail アドレス	
	氏名（経理担当者）	部署名・役職名		所在地
				郵便番号
		電話番号	FAX 番号	E-mail アドレス
共同事業者	団体等の名称	事業実施責任者		
		氏名	部署・役職名	電話・FAX 番号
現地での協力者 (予定でも可)				
事業の主たる 実施場所	※技術開発を行う場所と実証場所が異なる場合は両方を記載すること。 ※実施場所の地図を掲載し、引用する出典を明記すること。			

<事業の実施体制>

※代表事業者、共同事業者、国内・国外での協力者などの関係や事業における役割を示す実施体制を記載すること。

<本事業の目的・概要>

【概要】

※補助事業及び導入する設備等の概要（内容・規模等）について、簡潔に記入すること。（200字程度）

【背景・目的】

※本補助事業の目的を踏まえ、提案する技術に関連する国内外の技術開発・普及動向など、応募の背景について具体的かつ簡潔に記入すること。

※上記の背景を踏まえ、本事業の目的、事業期間中に直接的に達成すべき目標（アウトプット）を記入すること。

<技術及びリノベーションの内容>

【対象とする国・地域の概要】

※対象とする国、地域における対象とする低炭素技術分野の関係する制度、政策など政府の取組の状況及び現状での課題などを記入。

※当該国・地域の市場、需要、規制、慣習、資源制約など対象とする低炭素技術に関し、日本国内との諸事情、諸条件の違いについて記入するとともに、当該低炭素技術の現地における普及状況等を記入すること。

【対象とする低炭素技術の概要及び国内における活用状況】

※当該技術の適用分野、技術の概要、CO2 排出量削減効果、国内における実績（普及状況等）について記入すること

※「海外展開戦略（環境）」（平成 30 年 6 月制定）が対象としている分野との関係性についても説明すること。

【リノベーション及び実証の計画・方法】

※当該技術・製品を現地の事情に適合させるためのリノベーションの内容を具体的に示すとともに、実証の計画・方法について具体的に記述すること。

※目標とすべき価格や性能を、根拠を示し定量的に記載すること。

※実証を国外で実施する場合には、その必要性も簡潔に記載すること。

【対象とする国・地域における事業化・普及の見込み】

※現地での持続的な市場創造につながる現地人材の能力育成向上等への貢献についても記載すること。

※事業化の際の実施体制や資金調達の計画等を示すこと。

※事業化する上で現在考えられるリスク・課題について記載すること。

【将来的な国内への技術還流及び国内のCO2削減効果への貢献の見込み】

【その他】

<事業の効果>

【CO2削減効果】

(1) 事業による直接効果

・・・CO2トン/年

※本実証事業が完了し、その成果が事業化される際の一事業当たりの削減効果については以下の【CO2削減効果の算定根拠】により算定したCO2削減量を記載する。

【CO2削減効果の算定根拠】

※算出根拠をとなる計算式を記載し、さらに「算出根拠は別添のとおり」として「補助事業申請者向けハード対策事業計算ファイル」を添付すること。計算ファイルを作成する際は「地球温暖化対策事業効果算定ガイドブック<補助事業申請者用>（平成29年2月環境省地球環境局）」（以下「ガイドブック」という。）を熟読すること。ガイドブックと同時掲載の「補助事業申請者向けハード対策事業計算ファイル」は国内事業向けとなっているため、電力等のエネルギー種のCO2排出係数が固定値となっており、変更できない仕様になっている。本補助事業における計算には、対象とする国・地域によっては、国内とは異なるCO2排出係数を使ってCO2削減効果を計算する必要があるため、その場合は、GECウェブサイトの下記リンク先に掲載するCO2排出係数の変更可能な「補助事業申請者向けハード対策事業計算ファイル」を添付すること。

http://gec.jp/jp/innov_kobo2019_start/

なお、エクセルファイル（「補助事業申請者向けハード対策事業計算ファイル」）において記載する各々の設定根拠・引用元に係る具体的資料を添付すること。

【CO2削減コスト・算定根拠】

※【CO2削減効果】の「(1) 事業による直接効果」に記入したCO2削減量1トンを削減するために必要なコスト（円/tCO2）について、イニシャルコスト（総事業費÷法定耐用年数÷CO2削減量/年）及びランニングコスト（ランニングコスト（見込み）/年÷CO2削減量/年）の別に記入する。また、それらの算定根拠を記入する。

<事業費（概算）>

	2019（平成31）年度	令和2年度	令和3年度
工事費			
設備費			
業務費			
事務費			
合計			

※本事業期間が複数年にまたがる場合は、年度別の補助事業の事業費（概算）及び想定される経費区分・費目を記入する。

<資金計画>

※補助事業に要する経費を支払うための資金の調達計画及び調達方法を記入する。

<補助対象経費に含まれる設備・機器類の調達先>

補助対象経費に含まれる設備・機器等の中に、補助対象事業者自身から調達するものが

① 含まれる

・該当する設備・機器の名称：

（

）

② 含まれない

※いずれかに○を付け、①の場合には（ ）に該当する設備・機器の名称を記入する。

<事業実施に関連する事項>

【他の補助金との関係】

※本補助金以外の国の補助金等（固定価格買取制度を含む。）への応募状況等を記入する。

【許認可、権利関係等事業実施の前提となる事項及び実施上問題となる事項】

※補助事業遂行上、許認可、権利関係等関係者間の調整が必要となる事項について記入する。

【設備の維持管理計画】

※導入する設備の事業期間及びその後の法定耐用年数の間の維持管理計画を記入する。

<事業実施スケジュール>

※事業の実施スケジュールを記入する。事業期間が複数年に亘る場合には、全工程を含めた実施スケジュールとし、事業内容と照らし合わせ、何をどこまで実施するのかが明らかに分かるように記入する。また、後年度負担額も参考記入する。

※実施スケジュールは別紙を添付してもよい。

注1 本計画書に、記入内容の根拠資料等を添付する。

注2 記入欄が少ない場合は、本様式を引き伸ばして使用する。

別紙2-1 (中小企業者)

二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金

(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業) に要する経費内訳

事業名 _____

所要経費	(1) 総事業費	(2) 寄付金その他の収入	(3) 差引額 (1) - (2)	(4) 補助対象経費 支出予定額
	円	円	円	円
	(5) 基準額	(6) 選定額 (4) と (5) を比較し て少ない方の額	(7) 補助基本額 (3) と (6) を比較し て少ない方の額	(8) 補助金所要額 (7) × 2/3 ※千円未満切捨て
	円	円	円	円

補助対象経費支出予定額内訳

経費区分・費目	金額	積算内訳
(記載例)		
工事費	○○○	材料名 (数量) × (単価) = 金額
本工事費	○○○	
材料費	○○○	
・	○○○	
付帯工事費	○○○	
	○○○	
設備費	○○○	
業務費	○○○	
業務費	○○○	
事務費	○○○	
事務費	○○○	
共済費	○○○	
賃金	○○○	
・	○○○	
合 計	円	

購入予定の主な財産の内訳 (一品、一組又は一式の価格が50万円以上のもの)

名 称	仕様	数量	単 価	金 額	購入予定時期

注 本内訳に、見積書又は計算書等を添付する。

別紙 2-2 (中小企業者以外、単年度あたり 1 億円を超えるもの)

二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金

(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業) に要する経費内訳

事業名 _____

所要経費	(1) 総事業費	(2) 寄付金その他の収入	(3) 差引額 (1) - (2)	(4) 補助対象経費 支出予定額
	円	円	円	円
	(5) 基準額	(6) 選定額 (4) と (5) を比較し て少ない方の額	(7) 補助基本額 (3) と (6) を比較し て少ない方の額	(8) 補助金所要額 (7) × 1/2 ※千円未満切捨て
	円	円	円	円

補助対象経費支出予定額内訳

経費区分・費目	金額	積算内訳	
(記載例)			
工事費	○○○	材料名 (数量) × (単価) = 金額	
本工事費	○○○		
材料費	○○○		
	○○○		
付帯工事費	○○○		
	○○○		
設備費	○○○		
業務費	○○○		
業務費	○○○		
事務費	○○○		
事務費	○○○		
共済費	○○○		
賃金	○○○		
合 計	円		

購入予定の主な財産の内訳 (一品、一組又は一式の価格が 50 万円以上のもの)

名 称	仕様	数量	単 価	金 額	購入予定時期

注 本内訳に、見積書又は計算書等を添付する。

別紙 2-3 (中小企業者以外、単年度あたり 1 億円以下)

二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金

(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業) に要する経費内訳

事業名 _____

所要経費	(1) 総事業費	(2) 寄付金その他の収入	(3) 差引額 (1) - (2)	(4) 補助対象経費 支出予定額
	円	円	円	円
	(5) 基準額	(6) 選定額 (4) と (5) を比較し て少ない方の額	(7) 補助基本額 (3) と (6) を比較し て少ない方の額	(8) 補助金所要額 (7) × 1/3 ※千円未満切捨て
	円	円	円	円

補助対象経費支出予定額内訳

経費区分・費目	金額	積算内訳	
(記載例)			
工事費	○○○	材料名 (数量) × (単価) = 金額	
本工事費	○○○		
材料費	○○○		
	○○○		
付帯工事費	○○○		
	○○○		
設備費	○○○		
業務費	○○○		
業務費	○○○		
事務費	○○○		
事務費	○○○		
共済費	○○○		
賃金	○○○		
合 計	円		

購入予定の主な財産の内訳 (一品、一組又は一式の価格が 50 万円以上のもの)

名 称	仕様	数量	単 価	金 額	購入予定時期

注 本内訳に、見積書又は計算書等を添付する。

様式第18（第23条関係）

番 号
年 月 日

公益財団法人地球環境センター
理事長 鈴木 直 殿

補助事業者 住 所
氏名又は名称
代表者の職・氏名 印

令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金
(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業) 変更交付申請書

年 月 日付け 第 号で交付決定の通知を受けた二酸化炭素
排出抑制対策事業費等補助金（コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普
及事業）を下記のとおり変更したいので、令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補
助金（コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業）交付規程（以下
「交付規程」という。）第23条の規定により関係書類を添えて申請します。

なお、変更交付決定を受けて補助事業を実施する際には、補助金等に係る予算の執行の
適正化に関する法律（昭和30年法律第179号）、補助金等に係る予算の執行の適正化
に関する法律施行令（昭和30年政令第255号）及び交付規程の定めるところに
従います。

記

1 事業名

2 補助金変更申請額 金 円

3 変更内容

4 変更理由

(注) 具体的に記載する。

注1 交付規程第20条第3項の規定に基づき共同で交付申請した場合は、代表事業者が
申請すること。

2 2の金額欄の上部に（ ）書きで当初交付決定額を記載する。

3 添付書類は、様式第17のそれぞれに準じて変更部分について作成することとし、
別紙2については、変更前の金額を上段に（ ）書きし、変更後の金額を下段に記載
すること。

様式第19（第24条関係）

番 号

令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金
（コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業）交付決定通知書

補助事業者 殿

年 月 日付け 第 号で交付申請のあった令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金（コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業）については、令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金（コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業）交付規程（ 年 月 日 第 号。以下「交付規程」という。）第7条第1項の規定により、下記のとおり交付することを決定したので、通知する。

年 月 日

公益財団法人地球環境センター 理事長 鈴木 直 印

記

- 1 事業名
- 2 補助金の交付の対象となる事業及びその内容は、 年 月 日付け 第 号交付申請書のとおりである。
- 3 補助基本額及び補助金の額は次のとおりである。ただし、事業の内容を変更する場合において、補助基本額又は補助金の額が変更されるときは、別に通知するところによる。

補助基本額 金	円	補助金の額 金	円
---------	---	---------	---
- 4 事業に要する経費の区分ごとの配分及びこれに対応する補助金の額は、 年 月 日付け 第 号交付申請書記載のとおりである。
- 5 事業内容の変更等特段の事情がない限り、交付を行う補助金の額は、この交付決定額を上限とする。
- 6 補助事業者は、補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律（昭和30年法律第179号）、補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律施行令（昭和30年政令第255号）、二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金（コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業）交付要綱（ 年 月 日環 第 号）、二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金（コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業）実施要領（ 年 月 日環 第 号）及び交付規程に従わなければならない。
- 7 この交付決定に対し不服があるとき、申請の取り下げをすることのできる期限は 年 月 日とする。
- 8 補助事業における仕入れに係る消費税等については、交付規程第21条第2項ただし書の定めるところにより算定されている場合は、補助金の額の確定又は消費税の申告後において精算減額又は返還を行うこととする。

様式第20（第24条関係）

番 号

令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金
（コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業）変更交付決定通知書

補助事業者 殿

年 月 日付け 第 号で変更交付申請のあった令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金（コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業）については、令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金（コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業）交付規程（年 月 日 第 号。以下「交付規程」という。）第24条第1項の規定により、年 月 日付け 第 号で交付決定した内容を下記のとおり変更することを決定したので通知する。

令和 年 月 日

公益財団法人地球環境センター 理事長 鈴木 直 印

記

- 1 事業名
- 2 補助金の交付の対象となる事業及びその内容は、年 月 日付け 第 号変更交付 申請書のとおりである。
- 3 変更後の補助金の額は、次のとおりである。

変更前補助基本額 金	円	変更前補助金の額 金	円
変更後補助基本額 金	円	変更後補助金の額 金	円
増 減 額 金	円	増 減 額 金	円
- 4 事業に要する経費の区分ごとの配分及びこれに対応する変更後の補助金の額は、年 月 日付け 第 号変更交付申請書記載のとおりである。
- 5 補助事業者は、補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律（昭和30年法律第179号）、補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律施行令（昭和30年政令第255号）、二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金（コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業）交付要綱（年 月 日 第 号）、二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金（コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業）実施要領（年 月 日 第 号）及び交付規程に従わなければならない。
- 6 この交付決定に対し不服があるとき、申請の取り下げをすることのできる期限は 年 月 日とする。
- 7 補助事業における仕入れに係る消費税等については、交付規程第21条第2項ただし書の定めるところにより算定されている場合は、補助金の額の確定又は消費税の申告後において精算減額又は返還を行うこととする。

様式第21（第25条関係）

番 号
年 月 日

公益財団法人地球環境センター
理事長 鈴木 直 殿

補助事業者 住 所
氏名又は名称
代表者の職・氏名

印

令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金
（コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業）計画変更承認申請書

年 月 日付け 第 号で交付決定の通知を受けた二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金（コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業）の計画を下記のとおり変更したいので、令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金（コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業）交付規程（以下「交付規程」という。）第25条第三号の規定により関係書類を添えて申請します。

なお、計画変更の承認を受けて補助事業を実施する際には、補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律（昭和30年法律第179号）、補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律施行令（昭和30年政令第255号）及び交付規程の定めるところに従います。

記

- 1 事業名
- 2 変更の内容
- 3 変更を必要とする理由
- 4 変更が補助事業に及ぼす影響

- 注1 交付規程第20条第3項の規定に基づき共同で交付申請した場合は、代表事業者が申請すること。
- 2 事業の内容を変更する場合にあつては、様式第17の別紙1に変更後の内容を記載して添付すること。
 - 3 経費の配分を変更する場合にあつては、様式第17の別紙2に変更前の金額を上段に（ ）書きし、変更後の金額を下段に記載して添付すること。

様式第22（第25条関係）

番 号
年 月 日

公益財団法人地球環境センター
理事長 鈴木 直 殿

補助事業者 住 所
氏名又は名称
代表者の職・氏名 印

令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金
（コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業）
中止（廃止）承認申請書

年 月 日付け 第 号で交付決定の通知を受けた二酸化炭素
排出抑制対策事業費等補助金（コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普
及事業）を下記のとおり中止（廃止）したいので、令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事
業費等補助金（コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業）交付規
程（以下「交付規程」という。）第25条第四号の規定により関係書類を添えて申請します。

記

- 1 事業名
- 2 中止（廃止）を必要とする理由
- 3 中止（廃止）の予定年月日
- 4 中止（廃止）までに実施した事業内容
- 5 中止（廃止）が補助事業に及ぼす影響
- 6 中止（廃止）後の措置

注1 交付規程第20条第3項の規定に基づき共同で交付申請した場合は、代表事業者が
申請すること。

- 2 中止（廃止）までに実施した事業の内容については、様式第17の別紙1を使用し
記載するとともに、様式第17の別紙2に交付決定額を上段に（ ）書きし、中止
（廃止）時の実施見込額を下段に記載した書類を添付すること。

様式第23（第25条関係）

番 号
年 月 日

公益財団法人地球環境センター
理事長 鈴木 直 殿

補助事業者 住 所
氏名又は名称
代表者の職・氏名 印

令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金
(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業) 遅延報告書

年 月 日付け 第 号で交付決定の通知を受けた二酸化炭素
排出抑制対策事業費等補助金(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普
及事業)の遅延について、令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金(コ・イノ
ベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業)交付規程(以下「交付規程」とい
う。)第25条第五号の規定により下記のとおり指示を求めます。

記

- 1 事業名
- 2 遅延の原因及び内容
- 3 遅延に係る金額 金 円
- 4 遅延に対して採った措置
- 5 遅延等が補助事業に及ぼす影響
- 6 補助事業の実施予定及び完了予定年月日

注1 交付規程第20条第3項の規定に基づき共同で交付申請した場合は、代表事業者が
報告すること。

2 事業の進捗状況を示した工程表を、当初と変更後を対比できるように作成し添付
すること。

様式第24（第25条関係）

番 号
年 月 日

公益財団法人地球環境センター
理事長 鈴木 直 殿

補助事業者 住 所
氏名又は名称
代表者の職・氏名 印

令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金
(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業) 遂行状況報告書

年 月 日付け 第 号で交付決定の通知を受けた二酸化炭素
排出抑制対策事業費等補助金(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普
及事業)の遂行状況について、令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金(コ・
イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業)交付規程(以下「交付規程」
という。)第25条第六号の規定により下記のとおり報告します。

記

事業名 _____

経費の区分	交付決定額(円)	実施額(円)	遂行状況
計			

注 交付規程第20条第3項の規定に基づき共同で交付申請した場合は、代表事業者が報告すること。

様式第25(第25条関係)

番 号
年 月 日

公益財団法人地球環境センター
理 事 長 鈴木 直 殿

補助事業者 住 所
氏名又は名称
代表者の職・氏名 印

令和2年度消費税及び地方消費税に係る仕入控除税額報告書

年 月 日付け 第 号で交付決定の通知を受けた二酸化炭素
排出抑制対策事業費等補助金（コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普
及事業）について、令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金（コ・イノベー
ションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業）交付規程（以下「交付規程」という。）
第25条第十号の規定に基づき下記のとおり報告します。

記

- 1 事業名
- 2 補助金額（交付規程第29条第1項による額の確定額）
金 円
- 3 消費税及び地方消費税の申告により確定した消費税及び地方消費税に係る仕入控除
税額
金 円

注1 交付規程第20条第3項の規定に基づき共同で交付申請した場合は、代表事業者が
報告すること。

2 別紙として積算の内容を添付すること。

様式第26(第25条関係)

二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金
(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業) 取得財産等管理台帳
(年度)

事業名

財産名 (備品等名)	規格	数量	単価 (円)	金額 (円)	取得 年月日	耐用 年数	設置又は 保管場所

注1 対象となる取得財産等は、取得価格又は効用の増加価格が二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業)交付規程第25条第十四号に規定する処分制限額以上の財産とする。

2 数量は、同一規格等であれば一括して記載して差し支えない。単価が異なる場合は、分割して記載すること。

3 取得年月日は、検収年月日を記載すること。

様式第27（第25条関係）

番 号
年 月 日

公益財団法人地球環境センター
理 事 長 殿

補助事業者 住 所
氏名又は名称
代表者の職・氏名 印

令和2年度
二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金
(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業)
により取得した設備に係る譲渡の報告について

標記について、令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金（コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業）交付規程第25条第十四号に基づき、次の譲渡について報告します。

事業名：

事業名：

1 譲渡の種類 (該当するものに○)

(有償譲渡 無償譲渡)

2 譲渡の概要

①補助事業者		②設備名		③所在地	
④設備種別			⑤設備構造		
⑥補助相当額 (処分に係る部分の額)	⑦補助額全体	⑧総事業費	⑨補助年度	⑩処分制限期間	⑪経過年数
円	円	円	年度	年	年
⑫譲渡付の内容				⑬譲渡予定年月日	

3 経緯及び譲渡の理由

--

4 添付資料

- ・対象設備の図面及び写真
- ・補助金交付決定通知書及び確定通知書の写し (保管されてない場合は交付額を確認できる決算書でも可)
- ・共同事業者が譲渡を受けた設備を用いて実施する事業の事業計画
- ・その他参考となる資料

(記入要領)

1 譲渡の種類

いずれか該当するものを○で囲むこと。

譲渡：取得財産等の所有者の変更。

2 譲渡の概要

- (1) 「④設備種別」欄には、補助金交付額確定時の補助対象設備名又は補助事業に係る設備名を記載すること。
- (2) 「⑤設備構造」欄には、減価償却資産の耐用年数等に関する省令（昭和40年大蔵省令15号）別表第1の「構造又は用途」欄及び「細目」欄又は別表第2の「設備の種類」欄及び「細目」欄のうち該当するものを記入すること。
- (3) 「⑫譲渡の内容」欄には、次の例のように、譲渡の内容を簡潔に記載すること。
例：〇〇法人〇〇に譲渡し、同一事業で継続。

3 経緯及び譲渡の理由

譲渡をするに至った経緯と理由を記載すること。

4 添付書類

- (1) 対象設備の全部を譲渡する場合には、対象設備の図面や写真は添付しなくても構わない。
- (2) 補助対象設備の建設工事完了の検査済証、備品納品書、補助対象設備の事業廃止を証明する資料など、経過期間の確認ができる資料の写しを必ず添付すること。
- (3) その他参考となる資料については、「2 譲渡の概要」の各欄の記載事項の根拠や「3 経緯及び譲渡の理由」を補足する資料を添付すること。

公益財団法人地球環境センター
理事長 鈴木 直 殿

補助事業者 住 所
氏名又は名称
代表者の職・氏名 印

令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金
(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業) 完了実績報告書

年 月 日付け 第 号で交付決定の通知を受けた二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業)を完了(中止・廃止)しましたので、令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業)交付規程(以下「交付規程」という。)第28条第1項の規定に基づき下記のとおり報告します。

記

- 1 事業名
- 2 補助金の交付決定額及び交付決定年月日
金 円(年 月 日 番号)
(うち消費税及び地方消費税相当額 金 円)
- 3 補助事業の実施状況
別紙1 実施報告書のとおり
- 4 補助金の経費収支実績
別紙2 経費所要額精算調書のとおり
- 5 補助事業の実施期間
年 月 日 ~ 年 月 日
- 6 添付資料
(1) 完成図書(各種手続等に係る書面の写しを含む。)
(2) 写真(工程等が分かるもの)
(3) その他参考資料(領収書等含む。)

注1 交付規程第20条第3項の規定に基づき共同で交付申請した場合は、代表事業者が 報告すること。

2 別紙2については、中小企業者の場合は別紙2-1を、中小企業基本法第2条第1項に規定する中小企業者以外の者の場合は金額に応じ別紙2-2又は2-3を使用すること。

別紙1

二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金
(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業) 実施報告書

事業名				
代表事業者名				
代表事業者 の担当者	事業実施の担当者（責任者及び事業の窓口となる方）			
	氏名（責任者）	部署名・役職名		所在地
				郵便番号
	電話番号	FAX 番号	E-mail アドレス	
	氏名（窓口）	部署名・役職名		所在地
				郵便番号
	電話番号	FAX 番号	E-mail アドレス	
	氏名（経理担当者）	部署名・役職名		所在地
				郵便番号
	電話番号	FAX 番号	E-mail アドレス	
共同事業者	団体等の名称	事業実施責任者		
		氏名	部署・役職名	電話・FAX 番号
				所在地・E-mail アドレス
現地での協力者 (予定でも可)				
事業の主たる 実施場所	※技術開発を行う場所と実証場所が異なる場合は両方を記載すること			

<事業の実施体制>

※代表事業者、共同事業者、国内・国外での協力者などの関係や事業における役割を示す実施体制を記載すること。

<本事業の目的・概要>

【概要】

※補助事業及び導入する設備等の概要（内容・規模等）について、簡潔に記入すること。（200字程度）

【背景・目的】

※本補助事業の目的を踏まえ、提案する技術に関連する国内外の技術開発・普及動向など、応募の背景について具体的かつ簡潔に記入すること。

※上記の背景を踏まえ、本事業の目的、事業期間中に直接的に達成すべき目標（アウトプット）を記入すること。

<技術及びリノベーションの内容>

【対象とする国・地域の概要】

※対象とする国、地域における対象とする低炭素技術分野の関係する制度、政策など政府の取組の状況及び現状での課題などを記入。

※当該国・地域の市場、需要、規制、慣習、資源制約など対象とする低炭素技術に関し、日本国内との諸事情、諸条件の違いについて記入するとともに、当該低炭素技術の現地における普及状況等を記入すること。

【対象とする低炭素技術の概要及び、国内における活用状況】

※当該技術の適用分野、技術の概要、CO2 排出量削減効果、国内における実績（普及状況等）について記入すること

※「海外展開戦略（環境）」（平成 30 年 6 月制定）が対象としている分野との関係性についても説明すること。

【リノベーション及び実証の計画・方法・成果】

※当該技術・製品を現地の事情に適合させるためのリノベーションの内容を具体的に示すとともに、実証の計画・方法・成果について具体的に記述すること。

※目標とすべき価格や性能を、根拠を示し定量的に記載すること。

※今年度の実証の実績と成果について、定量的に示すこと。

※実証を国外で実施した場合には、その必要性も簡潔に記載すること。

【対象とする国・地域における事業化・普及の見込み】

- ※現地での持続的な市場創造につながる現地人材の能力育成向上等への貢献についても記載すること。
- ※事業化の際の実施体制や資金調達の計画等を示すこと。
- ※事業化する上で現在考えられるリスク・課題について記載すること。

【将来的な国内への技術還流及び国内のCO2削減効果への貢献の見込み】

【その他】

<事業の効果>

【CO2削減効果】

- (1) 事業による直接効果
- ・・・CO2トン/年

※本実証事業が完了し、その成果が事業化される際の一事業当たりの削減効果については以下の【CO2削減効果の算定根拠】により算定したCO2削減量を記載する。

【CO2削減効果の算定根拠】

※算出根拠をとなる計算式を記載し、さらに「算出根拠は別添のとおり」として「補助事業申請者向けハード対策事業計算ファイル」を添付すること。計算ファイルを作成する際は「地球温暖化対策事業効果算定ガイドブック<補助事業申請者用>（平成29年2月環境省地球環境局）」（以下「ガイドブック」という。）を熟読すること。ガイドブックと同時掲載の「補助事業申請者向けハード対策事業計算ファイル」は国内事業向けとなっているため、電力等のエネルギー種のCO2排出係数が固定値となっており、変更できない仕様になっている。本補助事業における計算には、対象とする国・地域によっては、国内とは異なるCO2排出係数を使ってCO2削減効果を計算する必要があるため、その場合は、GECウェブサイトの下記リンク先に掲載するCO2排出係数の変更可能な「補助事業申請者向けハード対策事業計算ファイル」を添付すること。

http://gec.jp/jp/innov_kobo2019_start/

なお、エクセルファイル（「補助事業申請者向けハード対策事業計算ファイル」）において記載する各々の設定根拠・引用元に係る具体的資料を添付すること。

【CO2削減コスト・算定根拠】

※【CO2削減効果】の「(1) 事業による直接効果」に記入したCO2削減量1トンを削減するために必要なコスト（円/tCO2）について、イニシャルコスト（総事業費÷法定耐用年数÷CO2削減量/年）及びランニングコスト（ランニングコスト（見込み）/年÷CO2削減量/年）の別に記入する。また、それらの算定根拠を記入する。

<事業費（概算）>

	2019（平成31）年度	令和2年度	令和3年度
工事費			
設備費			
業務費			
事務費			
合計			

※本事業期間が複数年にまたがる場合は、年度別の補助事業の事業費（概算）及び想定される経費区分・費目を記入する。（完了した年度は実績値を記入する。）

<資金計画>

※補助事業に要する経費を支払うために調達した資金の調達方法を記入する。

<補助対象経費に含まれる設備・機器類の調達先>

補助対象経費に含まれる設備・機器等の中に、補助対象事業者自身から調達したものが

① 含まれる

・該当する設備・機器の名称：

（

）

② 含まれない

※いずれかに○を付け、①の場合には（ ）に該当する設備・機器の名称を記入する。

<事業実施に関連する事項>

【他の補助金との関係】

※本補助金以外の国の補助金等（固定価格買取制度を含む。）への応募状況等を記入する。

【許認可、権利関係等事業実施の前提となる事項及び実施上問題となる事項】

※補助事業遂行上、許認可、権利関係等関係者間の調整が必要であった事項について記入する。

【設備の維持管理計画】

※導入した設備の事業期間及びその後の法定耐用年数の間の維持管理計画を記入する。

<事業実施スケジュール>

※事業の実施スケジュールを記入する。事業期間が複数年に亘る場合には、全工程を含めた実施スケジュールとし、事業内容と照らし合わせ、何をどこまで実施できたのかが明らかに分かるように記入する。また、後年度負担額も参考記入する。

※実施スケジュールは別紙を添付してもよい。

注1 本計画書に、記入内容の根拠資料等を添付する。

注2 記入欄が少ない場合は、本様式を引き伸ばして使用する。

別紙2-1 (中小企業者)

二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金

(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業) に要する経費所要額精算調書

事業名 _____

1. 経費実績額

(1) 総事業費	(2) 寄付金その他の収入	(3) 差引額 (1) - (2)	(4) 補助対象経費 実支出額	(5) 基準額
円	円	円	円	円
(6) 選定額 (4)と(5)を比較して少ない方の額	(7) 補助基本額 (3)と(6)を比較して少ない方の額	(8) 補助金所要額 (7) × 2/3 ※千円未満切捨て	(9) 補助金交付決定額	(10) 過不足額 (9) - (8)
円	円	円	円	円

2. 補助対象経費実支出額内訳

経費区分・費目	金額	積算内訳
(記載例)		
工事費	〇〇〇	
本工事費	〇〇〇	
材料費	〇〇〇	材料名 (数量) × (単価) = 金額
.	〇〇〇	.
.	〇〇〇	.
付帯工事費	〇〇〇	
.	〇〇〇	
.	〇〇〇	
機械器具費	〇〇〇	
車両購入費	〇〇〇	
事務費	〇〇〇	
共済費	〇〇〇	
賃金	〇〇〇	
.		
合計	円	

購入した主な財産の内訳 (一品、一組又は一式の価格が50万円以上のもの)

名称	仕様	数量	単価	金額	購入時期

注 本調書に、請求書、領収書又は計算書等を添付する。

別紙2-2 (中小企業者以外、単年度あたり1億円を超えるもの)

二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金

(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業) に要する経費所要額精算調書

事業名 _____

1. 経費実績額

(1) 総事業費	(2) 寄付金その他の収入	(3) 差引額 (1) - (2)	(4) 補助対象経費 実支出額	(5) 基準額
円	円	円	円	円
(6) 選定額 (4)と(5)を比較して少ない方の額	(7) 補助基本額 (3)と(6)を比較して少ない方の額	(8) 補助金所要額 (7) × 1/2 ※千円未満切捨て	(9) 補助金交付決定額	(10) 過不足額 (9) - (8)
円	円	円	円	円

2. 補助対象経費実支出額内訳

経費区分・費目	金額	積算内訳
(記載例)		
工事費	〇〇〇	
本工事費	〇〇〇	
材料費	〇〇〇	材料名 (数量) × (単価) = 金額
.	〇〇〇	.
.	〇〇〇	.
付帯工事費	〇〇〇	
.	〇〇〇	
.	〇〇〇	
機械器具費	〇〇〇	
車両購入費	〇〇〇	
事務費	〇〇〇	
共済費	〇〇〇	
賃金	〇〇〇	
.		
合計	円	

購入した主な財産の内訳 (一品、一組又は一式の価格が50万円以上のもの)

名称	仕様	数量	単価	金額	購入時期

注 本調書に、請求書、領収書又は計算書等を添付する。

別紙2-3 (中小企業者以外、単年度あたり1億円以下)

二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金

(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業) に要する経費所要額精算調書

事業名 _____

1. 経費実績額

(1) 総事業費	(2) 寄付金その他の収入	(3) 差引額 (1) - (2)	(4) 補助対象経費 実支出額	(5) 基準額
円	円	円	円	円
(6) 選定額 (4)と(5)を比較して 少ない方の額	(7) 補助基本額 (3)と(6)を比較して 少ない方の額	(8) 補助金所要額 (7) × 1/3 ※千円未満切捨て	(9) 補助金交付決定額	(10) 過不足額 (9) - (8)
円	円	円	円	円

2. 補助対象経費実支出額内訳

経費区分・費目	金額	積算内訳
(記載例)		
工事費	○○○	
本工事費	○○○	
材料費	○○○	材料名 (数量) × (単価) = 金額
.	○○○	.
.	○○○	.
付帯工事費	○○○	
.	○○○	
.	○○○	
機械器具費	○○○	
車両購入費	○○○	
事務費	○○○	
共済費	○○○	
賃金	○○○	
.		
合計	円	

購入した主な財産の内訳 (一品、一組又は一式の価格が50万円以上のもの)

名称	仕様	数量	単価	金額	購入時期

注 本調書に、請求書、領収書又は計算書等を添付する。

様式第29（第28条関係）

番 号
年 月 日

公益財団法人地球環境センター
理事長 鈴木 直 殿

補助事業者 住 所
氏名又は名称
代表者の職・氏名 印

令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金
(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業) 年度終了実績報告書

年 月 日付け 第 号で交付決定の通知を受けた二酸化炭素
排出抑制対策事業費等補助金(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普
及事業)の令和2年度における実績について、令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費
等補助金(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業)交付規程(以
下「交付規程」という。)第28条第2項の規定に基づき下記のとおり報告します。

記

- 1 事業名
- 2 補助金の交付決定額及び交付決定年月日
金 円(年 月 日 番号)
(うち消費税及び地方消費税相当額 金 円)

3 補助事業の実施状況

※交付規程第25条第五号の規定に基づきセンターの指示を受けた場合は、翌会計
年度に行う補助事業に関する計画を含む。

- 4 補助金の経費所要額実績
別紙のとおり

経費所要額実績

事業名 _____

(単位：円)

交付決定の内容		年度内遂行実績		翌年度繰越額	
(1) 補助事業に 要する経費	(2) 交付決定額	(3) 事業費 支払実績額	(4) 補助金 受入額	(5) 補助事業に 要する経費 (1) - (3)	(6) 補助金 所要額 (2) - (4)

令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金
（コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業） 交付額確定通知書

補助事業者 殿

年 月 日付け 第 号で交付決定した二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金（コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業）については、年 月 日付けの完了実績報告書に基づき、下記のとおり交付額を確定したので、二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金（コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業）交付規程（年 月 日付け 第 号。以下「交付規程」という。）第29条第1項の規定により通知する。

年 月 日

公益財団法人地球環境センター
理事長 鈴木 直

記

事業名

確定額 金 円

（超過交付額が生じた場合）

なお、超過交付となった金 円については、交付規程第28条第2項及び第3項の規定により 年 月 日までに返還することを命ずる。

様式第31 (第31条関係)

番 年 月 日 号

公益財団法人地球環境センター
理事長 鈴木 直 殿

補助事業者 住 所
氏名又は名称
代表者の職・氏名

印

令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金
(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業) 精算(概算) 払請求書

年 月 日付け 第 号で交付額確定(交付決定)の通知を受けた二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業)の精算払(概算払)を受けたいので、令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業)交付規程(以下「交付規程」という。)第31条第2項の規定に基づき下記のとおり請求します。

記

- 1 事業名
2 請求金額 金 円
3 請求金額の内訳

(概算払の場合)

(単位:円)

経費区分	交付決定額 ①	支出費用状況			概算払 受領済額 ⑤	差引請求額 ④-⑤
		実績額 ②	見込額 ③	合計 ④=②+③		
計						

(精算払の場合)

(単位:円)

交付決定額	確定額 ①	概算払受領済額 ②	差引請求額 ①-②

- 4 振込先の金融機関、その支店名、預金の種別、口座番号及び名義
5 概算払を必要とする理由(概算払の請求をするときに限る。)

注 交付規程第20条第3項の規定に基づき共同で交付申請した場合は、代表事業者が請求すること。

番 年 月 日 号

公益財団法人地球環境センター
理事長 鈴木 直 殿

補助事業者 住 所
氏名又は名称
代表者の職・氏名

印

令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金
（コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業）に係る
翌年度補助事業開始承認申請書

年 月 日付け 第 号で交付決定の通知を受けた二酸化炭素
排出抑制対策事業費等補助金（コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普
及事業）のうち、翌年度における補助事業について、翌年度の交付決定の日の前日までの
間において当該事業を開始する必要があるため、令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業
費等補助金（コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業）交付規程
第33条の規定に基づき下記のとおり申請します。

記

1. 補助事業の概要

- (1) 補助事業の名称
- (2) 補助事業の概要
- (3) 翌年度における補助事業の概要

2. 翌年度の交付決定の日の前日までの間において、翌年度における補助事業を開始する
必要性

3. 参考資料

様式第33 (第34条関係)

番 号
年 月 日

環 境 大 臣 殿

補助事業者 住 所
氏名又は名称
代表者の職・氏名 印

令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金
(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業)
年度事業報告書

年 月 日付け 第 号で交付決定の通知を受けた二酸化炭素
排出抑制対策事業費等補助金(コ・イノベーションによる途上国向け低炭素技術創出・普
及事業)について、令和2年度二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金(コ・イノベーシ
ョンによる途上国向け低炭素技術創出・普及事業)交付規程(以下「交付規程」という。)
第34条第1項の規定に基づき下記のとおり報告します。

記

- 1 事業名
- 2 事業実施による二酸化炭素排出削減効果について
 - (1) 年度二酸化炭素排出削減量(実績)
 - (2) 実績報告書における二酸化炭素排出削減量に達しなかった場合の原因
 - (3) 事業による成果の活用状況 ※事業化の状況や事業化に向けた検討状況等

注 様式第33は参考書式であり、事務の簡素化の観点から、任意の様式・提出方法を
指定する場合がある。

注 交付規程第20条第3項の規定に基づき共同で交付申請した場合は、代表事業者が報
告すること。